明治二十九年六月五日發行

女鑑

第百壹號

東京國光社



女鑑第百壹號

目録

嗣信忠信の妻



婦人の地位

婦人の主として力を盡すべきは家庭にあり。然れども、女子の身、決して天下に關係する所なしとなさず。つら〳〵古今盛衰の跡を考ふるに、女德の盛なる時は、國家亦盛に、女德の衰ふる時は、國家亦衰ふ。これ國家衰ふるに因りて、隨て女德の腐敗を來たすもの多けれども、女德の腐敗、亦社會腐敗を致す一因たらずんばあらず。げにや褒似一たび笑ひて、周室傾き、太眞寵を專にして、唐の天下、爲に傾かむとせり。古來女色の爲に國を失ひし君王、果して幾何ぞや。幸に我國の列聖は、神ながらの道正しく、女色などの爲に、國をみだりたまひし御跡、絶えてこれなけれども、天下の衆生にいたりては、悉く賢を賢として女に代ふること能はず。新田左中將の英雄なるも、勾當内侍の色に迷ひて軍機を誤り、降りて世に紛々たる御家騷動も、多くは女子の關係より起りしにあらずや。殊に平安朝の末の如きは、女德の最も腐敗したる時代なりとす。和泉式部を始め、和歌に堪能なる者、極めて多く、

物語、隨筆なども女子の手に成れるもの多く、賢媛才女輩出して、大に美を鳴らしたれども、翻て其品行を見よ、紫式部など數人を除きては、品行修まらず、淫靡、風を爲せり。かくては其才學も何かせむ、其名歌も何かせむ。幾代の女德を犧牲に供して、源氏物語、枕草子の如き大文學を得たるかと思へば、余輩、實に寒心する所なきを得ず。

才色、人を誤ること、古來然り、殊に一般の女德の亂るゝにいたりては、社會いかでか能く振肅するを得んや。社會の道德を修めんとせば、まづ婦人の道德を修めざるべからず、社會の地位を高めむとせば、まづ婦人の地位を高めざるべからず。女德の腐敗、社會の腐敗を來せる跡は、余輩史を繙いて之を知る。而して女德修りて、未だ社會の修らずといふことを聞かず。余輩は城を傾けし哲婦を證據として之を言ふにあらず。また罪惡の裡面には必ず女ありといへる西人の名言を舗張して之を言ふにもあらず。天の男女兩性を生ぜしもの、豈に獨り人種を繁殖せしむるにあらんや。男や、生れて强剛、力行苦業を濟すに適す。然れども、社會の事は、獨り强剛一方のみにては足らず、陰陽相和し、剛柔相助けて以て全きを致す。男の强き

に和して、以て社會を燮理するものは、豈に婦女の德にあらずや。此德ありて、女子能く社會に地歩を占むるを得べし。女子たるもの、たゞ應に其德を高むべきなり。

女子にして地位を高めむとせば、或は學問を要すべし。然れども、學問は、必ずしも女德を高むる所以にあらず。殊に學問を鼻にかけて、自から驕り、第一の婦德たる謙讓を忘れて、生意氣となり、お轉婆となるが如きは、最も不可となす。此の如きは、地位を高めずして、反て地位を下すものなり。歌も一通りは詠み、生花、茶の湯、さては琴をかなづるなど、上等婦人に必用なるには相違なけれども、これらは、末なり。女子の地位を高むるものは、唯女德のみ。

女子また、其地位を保つだけの見識なかるべからず。當代の女子、果して人に嫁せずして金に嫁せんとするの傾向を示すことなき乎。婚嫁は人生の大事なり。男子も女子の人となりを擇ぶべく、女子亦男子を擇ばざるべからず。家富める人ならば、たとひ愚なるも、痴なるも、顧みずして之に嫁するが如きは、女子の地位を高むる所以にあらざるなり。

女子はまたなべて物のあはれを知り、同情に富む。無用の費を省き、儉約をつとめ

て、其家を富まさむことを圖るべきは、言ふまでもなけれど、誤りて吝嗇に陷りて、一身一家以外の事を顧みず、親戚の窮を見て之を顧みず、婦人が社會の一團体として盡すべき慈善の事もなさゞるが如きは、亦女子の地位を社會に高うする所以にあらず。女子は慈悲の心あつし、女子は實に涙を以て社會を慰むるものなり。社會に事多し、而して婦人の慈悲の手を待つものも亦頗る多し。女子たる者、家庭の主任者として力を盡すと共に、また日本帝國の婦人たることを忘るべからず。固より出でて直接に社會につくすことを要せざれども、日本帝國の婦人として盡すべきこと少しとせんや。むかし、紀伊の南龍公の母君、己れの化粧料の一半を割きて塙團右衛門といふ勇士を養ひたまひしが如きは、實に婦人の高德なり。家を治むると共に、國家の觀念を強くし、女子相應の見識を供へ、其性に順ひて、一に慈善の事に盡くし、而して其位地高まらずといふものは、余輩信ぜざるなり。



誠は必ず貫くものなり（承前）

玉能舍主人伊豆雄

斯くて襖一重こなたなる、木村某は、風と此咄の耳に入るより、彌耳を欹て、逐一之を聞に皆心に覺え有る咄にて、爰に始めて、丹三郎と阿石の二人は、實の不義に非ざりしことを知り、且阿石の貞節を守りて、斯く成果たる上にも、猶聊も其身を汚さず、操を全うしたる事と、其云分の道理正しき事とに感心しけるが、さあらぬ体にて、襖の隙より指のぞき見れば、髪は剃さげ、風体こそ昔に替れ、其容貌更に丹三郎にまがひ無けれど慥に之を認め置きて、間もなく江戸表に歸り、我娘なる頼母が後妻お岩を呼寄せ、其聞し事共漏無く咄して聞せければ、お岩も大いに感じ入り、扨々夫はいたはしきことなり。末代の女の鑑とも成るべき人を、空しく埋れ木となし置むは、實に心無き事と云ふべし。わらは彼兩人には見知れぬ社幸ひなれ、此より宮の下に立越し、得と實否を探りたる上は、又致し方も有べしとて、夫より家に歸り、夫には父の勸めなりと云ひ拵へ、湯治の願を立、宮の下に趣き、湯治者の風をして、先烟草賣の喜八と餘所ながらに聞て、烟草を求め、二度も三度も買求めて親くなり。扨お岩喜八に云ふ樣、わらはちと仕立度物ありて、針の功者なる女中に、親く頼みたきが、其方の近付には、然る女中は無きやと問へば喜八答へて、いかにも針の功者なるもの御座候。則ち私方に同居せる女中なり。お氣に入か入ぬかは知ねど、試みに御相談あれかしと云へば、夫は幸ひなりとて、喜八方へ尋ね行て、阿石に先近付になり、仕

立物を頼みてそれを種とし、再三行て心安くなりたる上、お岩云やう、わらは湯治に來りて、久敷此地に滯留する積りなるが、何分にも女のことゝて、別に相手も無く、徒然を慰めかねて、淋しさ云ん方無し。御身は縫物も功者なれど、何角聞度こともあり。又頼度縫物もあれど、逗留中は心安く、わらはが寓居へも來り給へ、又此方へも參るべしとて、夫より打解て親み、互ひに心置無く相語らふ中とは成りぬ。斯て或時何と無く問けるは、御身は元來此邊にて生立たる人とも覺ねす。其上喜八殿と夫婦の樣にて、又互ひの挨拶を聞ど、いと義理深くして、他人のやうなり。總て合點の行ぬ所あり、此には何か仔細も有るべし、わらはに於ては決めて他言すべからざれど、包まず事の由を語り給へと云へど、阿石答へて成程然宣ふも尤なり。喜八殿とわらはゝ全く夫婦にはあらず、耻かしきことながら、わらはも元人らしき者の妻なりしが、聊仔細有りて、斯く淺間敷は成果たり。併し是も前生よりの約束でとかど、是非なく明らめて居るなりと云ひけれど、お岩わざと驚きたる風して、扨は喜八殿と夫婦にては無きや。道理で社合點行ぬ挨拶なりしなれ、然わらどわらは知たる人に、手の利たる妻を欲がりて頼まれをれり。尤身柄もよく豐かに暮す人なり。御身行給はゞ結搆なる身と成給ふなり。わらはが兄弟分にして、婚姻させ申すべし。御身の器量と云ひ、手利と云ひ、其方の預ての望に適へど、十が十ながら調ひ申すべし。わらはも末頼もしき兄弟を求むることなれど、いかでかりか嬉しからん、此事必ず〳〵わらはに任せ給ふべしと云ひければ、阿石云ふやう、夫は實に忝き仰せなり。然りながらわらはに於ては、最早一生男を持所存更に無し。若も男を持程ならど、今の喜八殿と夫婦にも成べき身なり。其故は喜八殿とわらはゝ、間違ながらも不義の名を負て、今此体には成果たり。されど

其暮八殿とすら、堅く云ひ切りて夫婦とはならぬ程のことなり。況てや外々の方へをや、去かし私如きの便り無き身を、御世話なし下されんとの御志の程は、其嬉さ何にか譬へん。然りながら唯妹背の事のみは、今申す如くなれど、必ず御世話下さるまじと、云ひ切れど、れ岩然あらば、御身の先の夫は未だ此世に居給ふか、但し死給ひしか、夫をば知り給ふやと尋ねければ、阿石少しく兩眼に涙を浮べて、然ればなり別れて既に五年の間、其音信を聞ねど、其生死のほどだに知らねど、縦令死し給ひしにもあれ、わらはゝ元より他夫にまみゆるの心さら〳〵無しと云へど、今はれ岩も堪ねかねて、然らば御身が先の夫は、浮橋頼母とは云はざるかと云へど、阿石大いに驚き、如何にして夫を知り給ふぞと云ふにぞ、其は仔細ありてわらはが知る人なりしかし。此人は、今後妻を迎へて、御身に倍して、わり無く睦まじく語らひ給ふ。然れど御身如何ほど、義理を立給ひても無益なり。今は思ひ明らめ給ふ外はあるまじと云へど、其はさも有るべき筈のことなり。わらはが事をは嘸かし憎しみ思ひ給ふべし。然し後妻を迎へ給ひしは責てのこと、それにてわらはを憎く思召すことも、少しは忘れ給ふべしと、今承たまはりて影ながら嬉しく思ふなり。唯わらはゝ此儘埋れ死て、未來に於て云ひ譯を致さんと思ふ外無きなりと云へど、今はれ岩も彌たまりかねて、何を隠さうみづから社其頼母が後妻にはあれ、御身の不義ならざることをぞ、先達て得と聞置たり。誠に御身の如き人は、三千世界に又とは有るまじ、兎にも角にも、わらは次第に任さるべしとて、無理に強て駕に乘せ、江戸表へ立歸り、先父木村某方へ阿石を預け置き、我身は頼母方へ歸りて何と無く、暇を乞ひ離縁致し度旨を願ひ出ければ、思ひも寄らぬ事とて、頼母も驚き入りたるばかりにて、返答だにせざるを以て、強て願ひ出るにぞ、然らば俄然

に離縁を乞ふは、何か仔細の有ること成べし。先其仔細を聞たしと尋るより、成程譯を知給はねど、合點し給はぬも尤のことなり。實は別のことにはあらず、わらは暇を取りて、先妻阿石殿と、御歸縁を勸め參らせんが爲なりと云へど、賴母以の外に顏色を變じ、其方は狂氣でも去はせざるか、今にも目に懸らど、討て捨むと思ふ畜生めを、何して再び妻となすべき。此は實に存じも寄らぬことなりと云ふ時、れ岩も色を正し、然れどの事にて候、阿石殿全く不義にあらざる由は、父木村此間宮の下にて聞出し歸り、わらはに物語られし故、其實否を正さん爲、わらはも其と無しに、父の勸めと稱して、御身の許を受け、湯治の爲宮の下にゆき、餘所ながら阿石どのに近付になり、段々探り見しに、眞實阿石殿の不義にあらざること明白になれりとて、其父の聞來りし丹三郎の咄は云々なりし、又わらはが阿石殿と親しく應對せしは云々なりしと、其見聞したる儘を委しく云ひ聞せ、斯る操正しき婦人は、世界に又とは有るべからず。誠に女の鑑となるべき人なり。斯る人に不義の惡名を負せて、空しく打捨置むは、此上の情無きことは有るべからず。わらは此事を知ざらんには、是非も無き次第なれど、既に斯く明白に知りたるを、爭でか默りて居らるべき、其上わらはこと、親達の進めて止み給はざるが故に、止ことを得ず御身に再縁したれども、何につけかにゝつけ、死別れたる先の夫のことは、露いさゝかも忘るゝ際無し。然れど御身を大切に思ふとはすれど、實は二心無しとは云ひ難し。之に反對て阿石殿は、一途に御身の事をのみ思ひつめて、毫も二心無きこと、則ち前に申せる如くなれど、御身に取てもわらはに添給はんより、阿石殿を呼び返されんこと、御身一生の御爲めなり。兎にも角にもわらはには是非〳〵御暇を給はり。阿石殿を御歸縁有るべし。實は父木村方まで伴ひ來り置たりと、云へ

も、頼母も初めて阿石が不義ならざりし事實を知り。且然程の艱難をも凌ぎて、五年の間其身を汚さず、我爲に貞節を守り。操を全うして有りしと聞ては、今更不便の情遣方無くは思へど、然り迚お岩に暇を遣はさんとは、云ひ出べくもあらぬのみかは、斯く云ふお岩が心の程も甚忍びしくて、其返答に窮したるを見て、お岩は其儘立て納戸の方へ這入り、我髮を元結際より押切て立出來り、是程に申ても御暇を給はらぬは、若も外心にても有らんとの御疑ひもあらんか、阿石殿の心底を聞ては、わらはゝ御身に再緣せしことさへ、口惜く恥かしく思ふことなれど、況てや此上誰にかまみえ申すべき、斯く姿を替たる上は、唯先達れし先の夫の跡訪ひ參らするの外無し。今まで御身に馴染しは、只假寢の夢と明らめ給へかしとて、其儘父木村方に行、阿石を伴ひ來り、我身媒介して、頼母阿石を元の夫婦となし。己れは直ちに寺に詣て尼となり、袈裟衣を身に纒ひて、先の夫の後世をとふ身となりしとなむ。斯くて此由を家老木村某より、其主人に委しく屆け出けれど、主人殊の外に感ぜられ、先阿石の貞節實に感ずるに餘りあり。又お岩が賢德譽るに詞無し。これこそ世界の女の鑑。實の貞女賢女とは此二人を云ふならんと、甚之を稱美し。さすれど丹三郎にも罪無しとて、半地にて召歸されしが、間無く立身して本地に復り、頼母丹三郎又元の水魚の友となり、浮橋清島の兩家ともに、甚目出度榮えたりと云ふ。此は或る草紙の中にも見えたる話なれど、さのみ珍らしきものにもあらねど、彼浮橋頼母が妻の阿石が、斯る不慮の災難に遭ひ、五年の久しき間、淺間敷までに成果たれど、天を恨ず人を咎めず、貞節を守り操を全うして、未來までも無く此世にて、天地に貫きたる誠の通りて、再び元の夫に歸緣することを得たるは、抑何によりて斯在るか、是即ち上に述べたる歌の如く、すみ濁るを知看す、天地

の神の坐まして、其實を蔽ひ果しめ給はぬに由に非ずや。彼宮の下の温泉場にて、木村某が襖一重隔て丶居とも知ず、丹三郎が語れることの、慮らずも木村某の耳に入りて、遂に其誠の顯はれたるが如き、決めて偶然のことにはあらず。目にこそ見えね、皆神の引合せ給ふ御計らひなること、又何ぞ云ふを待む。然れど誠は必ず貫くものなり。此話は其誠の必ず貫く所以を證するものなり。讀者請ふ能く之を翫味せられむことを。

（完）

女子敎育一班（十）

三輪田眞佐子

あはれ、過去及び現在の女子敎育が適當を得ざることかくの如くなれど、我が女子一般のため、寧ろ國家百年のため、女子敎育の善き方針を求めでやはあるべき。おのれおもふに、女敎の善き道を得んとならど、先づよき標準を撰むこそ、肝要ならめ、故にその標準となるべき事項を例示せん。

第一、天然なり。こは漠然たるやうなれど、實は万古不易の眞理なれど、宇宙の事物悉く法をこの天然に取らざるものなし。試に宇宙の光景を見よ、天に日月星辰の運行し、地に草木禽獸の生存するも、悉く天然の法を有たざるものなきを、近來それらの事は物理あるは生物學等の進歩によりて、各不易の眞理を發見せしを以て、誰れも疑ふものなからんも、まだき人類の道德等形而上の眞理は、形而下のものと相異なるを以て、これを理化學の作用により、實驗に徴して、證明し難きものから、如何しく惑ふものも多からん、なれど、勿論人類とて、宇宙の大勢に従はずして、生存すること能はざれど、庭前の落花を見て、あはれとおもふ人は、將に其身の死滅を悟るべき理なるに、松が浦島にありて、斧の柄の朽ちし例を妄想し、あるは遂

萊山に入りて、不死の藥を求めし如く、人は天然に從はずして、別に欲望を遂げんとする傾きあるこそ愚なれ。されど女子敎育に於ても、適當なる標準を撰ぶには、必ず天然の理を基とせざるべからず。徒らに空論を弄ぶは、さながら身を仙境に置かんとする痴人と異なるものかは。

されど女子の天性を考へて、女子と男子の關係を正し、女子の天職を知りて、女事女務を定むべきは更なり、一般女子の感情等、女性の心理學ともいふべき事項を研究し、以て女德の基礎となすべきなり。蓋しかゝる研究は形而上のことなるをもて、決定し難きことも多からん、なれど、其のときは天然の光景を參考すべし。空に月ありて、優に妙なる德を示し、地にはいとやさしき女郎花、生ふなど、女性の摸範乏しからず。詩經といふ書に、鳶は天に戾り、魚は淵に躍るとは、其の上下のいちじるしきをいふなり、とあり。そは天地の化育流行上下昭著なるをいふならんかし。

第二、國情なり。上に述べつる如く、天然に典とれた、秋毫だに不可なることはなからんも、時勢國体等の情態をも察し、以て女德の標準を定むべきなり。例之ば西洋の女子は、上帝に事ふることぞ、必要ならんも、我國はかしこき大君に勤むることこそ肝要なれ。亦ある國には、肉親も他人も差別せずとかや。されど我國人は孝道を踐まざるものは、人と數へざるあり。時勢に就きて考ふるに、泰平無事の時には、個人道德を先きにすべきも、軍國多事の期には、國民道德を專にすべきが如し。故に女子を敎育するにも、國情如何を思ひて、その標準を定めざるときは、單に益なきのみかは、將に大害あらん、恐るべきことにこそ。

かくのごとく、天然に從ひ、國情を汲みて、以て女敎の標準を定むべきものならんかし。元來天然を典とするからは、世界各國の女子は等しき女德を具ふべきも

のなれど、唯國情より各國女子の氣風を異にするものなれど、今日の如く、女子敎育の主義一定せずして、あるは西洋に僻し、あるは漢風に泥む時代には、明確によき標準を撰ぶべきなり。すなはち天然を法とする訓戒などは、他國の言の葉をも摘むべし。獨り國情に關係することは、必ず日本といふ觀念を離るべからず目下女子敎育に於ても、彼れ是れ主義を異にして、互に罵詈するは、かゝる單純なる道理を辨へざるにや。おのれは、女子敎育につきて、夙にかく覺悟せしを以て、決して西洋にも支那にも倣ふことを欲せず。さりとて、日本の舊慣のみに偏するをも望まざるなり。もしかゝる考が誤まらずむ、女敎の標準確乎と定まり得べし。從ひて日本女子の信向一轍に出でん。凡國民がその道心を異にするときは、畫一の風俗はなかるべし、巳に畫一の風俗なからんか、國家それより亂れん。あはれ女敎標準を定むることの必要は、單に女子のためならんや。

或人曰く、社會には進歩といふことを重ずるものなれど、天然とか、國情とか、いとむつかしきことを言はで、大概なる理想を定め、これを標準とするこそ良法なれど、されど幾そたび祈らんも、馬に角をぞ生じ得しめざる如く、女子の天性は變ずべからざるを以て、天然を非るものは、最早語るに足らず、尤も進歩といふことは、一日も忘るまじきことなり。おのれのいふ國情には、時運をも含むものなり。この頃西洋の人は進化論とて、万物悉く面目を改むる性ありとぞ、唱ふなり。されど天然の範圍を離れて、妄りに變化するものにあらざるべし。進化も天然なり。世の女德を忽にするものどもが、文明とか、進歩とか、とかしがましくいひて、責を免れんとするめり。果してそが眞正の進歩にや、聞かまほしう覺ゆるになん。



史談

佐藤嗣信忠信の妻

鹽井ふく子

奥洲白石の城下より、一里半ばかり南なる、才川と云ふ驛の町はづれに、高福寺とて昔は名だゝる一個の古寺なりしが、今はあれはてゝ草のみ徒らにふかく、屋やぶれ、軒くづれて、雨も風も洩るばかりにて、住侍もあらねば、本尊もかげだに見えず。木魚磬なくして、たゞ梟の住家となりはてぬ。此あれ寺の中に、一つの小堂あり。俗に甲冑堂といひて、堂の書きつけには、故將堂とありて、大さ纔に二間四方斗の堂なりとぞ。本堂已に、いたくあれたれば、この小堂の破損は云ふまでもなく、軒も椽もくちはてゝ、佛像やうのものもあらねど、只婦人の甲冑して、長刀を持ちたる木像二つのみ安置されて、今もなほいさましげなり。如何なる人の像にかと云ふに、源義經の臣にて、音に聞えたる無二の忠臣、佐藤繼信、同忠信の妻の像なりけり。

始め義經鞍馬山より出でゝ、陸奥なる清原秀衡方に、身を寄せけるが、その兄賴朝、義兵を擧げて、關八洲を切り靡け、木曾義仲は北國に起りて、向ふ所敵なく、京洛まで攻め登りて、平家を追落し、奇世の功を立てけるを、ほのかに傳へ聞きて、兼ねてより平氏を亡ぼし、親の仇を報ひんと思ふ心の深かりければ、已れも鎌倉へ登りて、兄と力を合せばやと、心頻りにいらだち、秀衡に事の由を述べて、いとまを告げけるに、秀衡の申すやう、御身の智勇を以て、佐殿に御力をそへ奉らば、平氏を亡ぼさんは、掌をかへさんよりも安

く、大功を立て給はん事、鏡にかけて見るが如くに候へども、中々に御身体は危く覺え候。平氏を伐ち、天下を定めん事は、佐殿にまかせ置き給ひて、御身は此奥羽二洲の大守と成らせ給ひて、世を安く過ぐし給へといへども、義經は兎角に思ひ立ちし心の禁じがたく、不肖の身をつゝがなかれと思はるゝ心のほどはうれしけれど、義を見てせざるは勇士のはづる所なり。まして、親の敵をよそに見過さんは、大丈夫の所為にあらざればとて、强ひていとまを告げ、其外武藝の師たる、杉目太郎行信、佐藤庄司元治などにも、別を告げゝるに、元治も秀衡の諫言至極なりとして、再三とゞめしかど、血氣にはやりし勇士の志の、なか〱に、ひくべくもあらざれば、さらば、兎に角に、御心のまゝに行はせ給へ、されど、鎌倉へ登り給ふとも、佐殿の御下知を、必ずしも背き給ふな。八平氏、四藤、私黨の進退、必ず侮り給ふな。これらは、皆古實の家にて候ぞ。御身は頭の殿の公達の中にも、御妾腹にて、殊に御末子なりと云ふ事をゆめ忘れ給ふな。若し木曾の討人の大將を命じ給はゞ、二度までは御辭退なし給へ。佐々木、梶原に、御心を許し給ふな。三浦、上總、畠山には、睦じうなし給へ。天野は弓法の達人、下河邊は故實の家にて候へば、萬事の御評議、問合せ給へ。何事も寛大を専にして、血氣になはやり給ひそ。さればとて、人に後れ給へと申すには候はず。已れも御供致すべき筈なれど、此の如きの老衰、もはや、御役に立たんとも覺えず。嫡子三郎兵衛嗣信と、次男四郎兵衛忠信とを、名代として御供つかまつらせんほどに、士卒ともなして使ひ給へとて、傍をかへりみ、兄弟のものに向ひて、汝等今より家ありと思ふな。親をも忘れよ。妻をも子をもかへりみる事なかれ。忘るゝが孝、かへり見ぬが武士なるぞ。生きて二度、此土をふまんと思ふな。さればとて、犬死をなすなとて、ねんご

ろにときさとし、妻子等にも、各離別のさかづきを、さゝせなどす。かくて、義經公は、人々にも別れをつげ、元暦二年十月十日と云ふに、佐藤兄弟を始めとして、杉目小太郎行信、伴七郎治知、金剛次郎秀方、伊勢三郎義盛、武藏坊辨慶、常陸房戒尊、堀彌太郎、江田源藏、龜井六郎、駿河次郎、片岡八郎、雑式鬼二郎幸胤、鬼三太淸悦等、及び軍兵三百余人を率ゐて、丸山の館をぞ立ち出で給ひぬ。秀衡、元治等皆別を惜しみて、國境まで送り出でたり。佐藤の母と、妻とは、流石女心の、涙を袖につゝみかねて、なく〳〵ぞ送りける。

さて其後、佐藤の家にては、まもなく、元治みまかりて、殘るは元治の妻、及び嗣信忠信の妻と、その二人の子の、幼きものどものみなり。嗣信忠信の妻は、夫の安危を、たえず心には思へども、老いたる母の心をぞいためじとて、つゆ涙をももらさず、中々に常にははげみ勇みて、二人心をひとしうし、萬事心してつかへたりけれど、老母も、二人が子の安危を思はぬにはあらねど、二人の妻に、なぐさめられて、時としては忘るゝ事もありしほどなり。

さて義經は、京都へ登り、平氏を亡ぼし、一の谷矢島にて、世に類なき大功を立て給ひしかど、運拙く、佞人どもに讒せられて賴朝が疑心をうけ、再び奥州へ下り給ひぬ。佐藤の老母は、かくと聞くより、我子に逢はれんかと、かなしき中にもよろこびしに、あはれや、兄の嗣信は、矢島にて義經公の身に代りて、能登の守敎經が矢先きにかゝりて、果敢なく戰塲の露と消え、又弟の忠信は、義經公兄の不興を被りて、吉野ににげられけるに、山門の僧ども、賴朝の咎めを恐れて、夜半に至り、俄にせめよせ來りし時、義經公一同もろともに、討死せんと云ひしを、山寺の僧ばらと戰ひて、死したりと云はれては、後々までの耻辱なり、恐れなが

ら、我が君の甲冑を貸し給へ、敵をいつはり候はんとて、强ひてひとりとゞまりて、山僧をふせぎ、遂ひに一身をなげうちて、義經公をやすらかに落しまゐらせ、兄弟二人とも、いとも名譽ある討死を遂げたりとて、形見ばかり返り來りしに、老母のかなしみは一方ならず、天にあこがれ、地に伏し、もろともに行きたる龜井片岡などの、歸れるを見るに付けても、兄弟の内何れか一人なりとも、彼の如くつゝがなく歸りこされなむなど、流石女心、恩愛にひかれて泣き沈むに、かなしさは、何れも同じなる兄弟の妻も、心はちゞにみだれたれど、なほ母の心根を慰さめんとて、各夫の甲冑を着し、鎗、刀など横たへて、さもいさましげに出で立ちて、只今、兄弟つゝがなく、凱陣つかまつりぬとて、其姿をまねびて、老母に見せけるに、老母も二人の心のうれしさに、漸くに兄弟の事どもを思ひたちけるとぞ。げに、此夫にして、此妻ありとやいはまし。あはれ、傳へきくだにかなしくて、涙に筆も動かぬを兄弟の妻のかなしさをつゝみて、母を慰めし心の中は、如何なりけん。げにやさしう、あはれなる事や。かくありてこそ、流石は忠臣の妻、義士の婦、世の女子の鑑となりけれ。其頃の人々、この二人が婦の孝心を、あはれみ慕うて、其姿を木像にきざみて、後の世に殘しけるもうべや。

孝婦いち女

永石薫風

こは享保のころのことなり。豐後の國の儒三浦安貞といへる人のものせられたる婉娩錄といふものにのせたり。文なだらかによみやすけれど、そのまゝをぬきいてゝかゝげつるになん。

頃日、孝婦いち女がこと聞けるにぞ、哀を催し侍る。いち女は豐前宇佐郡、御許山の陽、矢部村彌平、（一書に彌兵衛）

りといふ者の妻なり。彌平貧く、一人なる母も目しひ、其身も人の厭ふ病に沈み、目鼻うがち、手足たゞれ、あやしくいなさき形となり、さらばひによべるさま、餘所目だに忍びがたきを、いち女いよ／＼堅く病を看るいとま、晝は彌平が幼き弟あるを携へ、終日耕し草ぎり、夜は舂きつゝきしいせぬるひまも稀に、二人をはごくみやしなひけり。彌平、いちが苦しめるを見るに忍びず、或時枕本に招ぎ、汝が我に代り母によく仕へ、我見苦しき氣を厭はず、多年淺からざる志謝するに所なし。宿病ゆく／＼癒ゆることあるべからず。此上は家に歸り、ことのうさ忘るゝかたも、人の云ふに任すべし。かゝらば、せめて宿債をもつぐなひ、深恩をも謝し、いさゝか心もやすかりなん、と云ひければ、いち聞きて、涙をながし、我此家に來りしより、誓ひて他適の志無し。君無事の日は、相添ひまゐらせ、君病める日は、見棄てまゐらせん、など、さもしき心ばへあらんや。君かくあさましき身となり給ふも、天命なり。我君につれそひまゐらするも、天命なり。天命いづれの處にか遁るべき、とてうけひかず。いよいよあつく事へけるが、雪に霜をかさね、其弟もまた兄の如き病を得、ひとりの手弱女、病みさらばへるを養ふにも、元より糧となすべきものもなく、元より宇佐の市に行程一里ばかり、伊波堀（又岩坂とも云ふ）とて、けはしき道あり。之を薪こり、一日に二度つゞ此坂を越え、米、鹽やうの物調へ、飢をつゞきける。寛保辛酉の秋、彌平終に身まかりぬ。いち死骸に取付て、痛哭の聲、鄰を動かす。元より葬いとなむべき貯もなく、彼是借求めて、其事も終りぬ。程なく盡七日の追善をはりて、ちなみの人ども集り、いちが孝貞世にたぐひあらじ、なほ積れる年にもあらず、かくて日月をれくらんには、いつしか人の門にもたちなん、せめてさらずも、有れかしと、思ふなり。此上は故郷に歸れ

かしと、懇に勸めけるに、けうがる顔して、心得ぬ事をも承るものかな、目しひたる姑、病める小じうとあり。朝なゆふなの烟も、我なくぞ、誰かあげん。垢づける衣、うるはへる床も、我なくぞ、誰かすゝがん。夏の日の暑さ、冬の夜の寒さも、我無くぞ、誰か扶けん。假令乞兒となるとも、此處を捨てゝ何處に行かんとて、操たゆます。明し暮しける。月日留むる關もあらたまの年はかへれど、姑に供へんものなし。家に一柄の鍬を餘せり。之を典りて錢八十文を得たり。此あたひにて、鹽を求めて、若鹽とて貧しき者の、かすかなる業に、家毎に初春の壽とて、持ち行くにぞ、里人も哀にたへて、米粟むくいけるに、數年を得て、露の命の消ねやらねぞかり、春を過しね。去程に其貞節孝友世に喧すしく傳へて、程なく領主中津、奥平侯にも聞ねける。侯窃に人をして、其狀をうかゞはしむるに、小路にて破れたる衣、うかる草鞋をどろの髮ふり亂し、薪を頂きて、市に行くを見て、耕へすをのこに、これを問へぞ、孝婦いちと答ふ。よりて跡をふみて其家に至りて見るに、雨露をだにふさぎやらぬあぢら屋に、二人の者床にあり。いち今日購へたる物を、煮炊きすすむるに、色を和し、容うや〳〵しく、あたかも賓主のごとし。急ぎ歸り、此由君に達しけれぞ、君にもいたく感じ給ひ、米若干を給ひ、盡きなぞ重ねて賜はらんと重き惠を受けたり。今は其人も昔語にぞ成にける。

薫風いはく、つら〳〵世のありさまを見るに、婦德をさまらず、素行正しからず、わが心のまがれるに心づかずして、夫にしたがはず舅姑にそむくものなきにあらず、甚しきに至りては、三日をだにねたもたず、家にありては父母の敎をまもらず、嫁つぎては、舅姑をないがしろにし、世にうとまれ、人に憎まるゝものすくなからず。いたむべきなり。かゝる人この傳をよなみぞ、はぢて死ねべからん。



活花（十二）

田邊和氣子

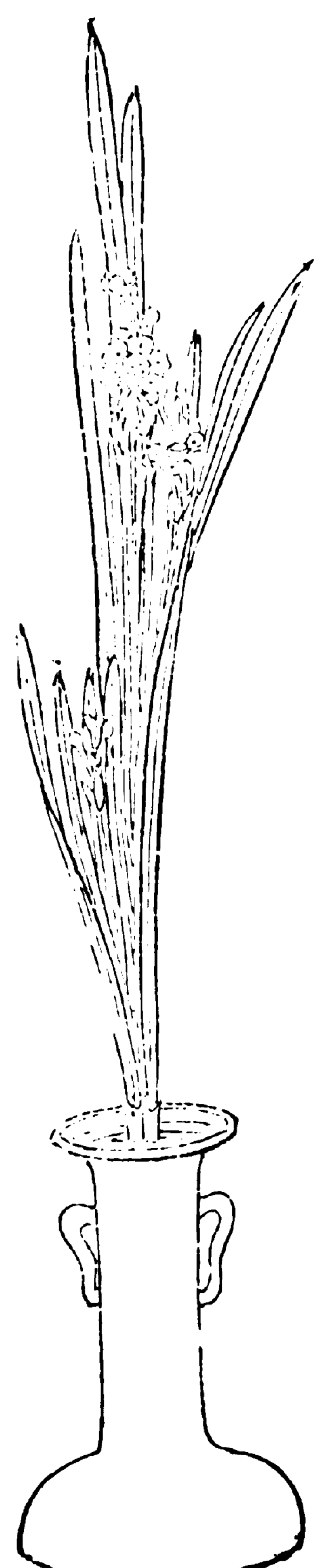
あら玉の年の始の活花には、めでたきものころよからめ。千代も變らぬ松が枝に、梅と竹とを活添へたらむはいかでかりかふさはしからむを、此流の家元のおきてには、始の許しを受けざるうちは、松竹梅を活る事をえず。されど今少し熟練したまひて後、又來むとしの始にとゆづりつ。されど子の日をかたどりて、千代のためしの若松に玉椿を活添るぞよからむかし。



松のふりをかしきを見たてゝ眞とし。副には少しろりあるを用ひてよし。体なる椿は眞の前へは蕾ある枝の丈け高きを用ゐ、中程へは花の開きたる賑はゝしきを

付け、前へは又蕾ある少し長きを用ゆべし。椿の葉のいやがうへに重るも見ぐるしけれど、よき程に切り取りてよし。眞副の松の葉も重りてしげり合ふ所はよき程に鋏もて切り落し、圖の如くすべし。

今一瓶は雪間を分て求めたる水仙の花。こは前號にもいひし如く薬物の一種にして、普通の活かたに變れり。さても此花を活るには、一本づゝ其根元に白き袴の如きものあり。この袴を其儘にして眞副体の寸尺を定むれど花と葉と別れ／＼になるなり。故に先づ切らずして、思ふ寸尺の處へ下なる袴を手にてこきあげ、眞副体とも活たる水際より、白き袴の五六分斗りみゆる樣に斗ふべし。此花は一種活るを法とすれども、立春とならど、梅などの体に用ゆるもくるしからず。



たちぬひ

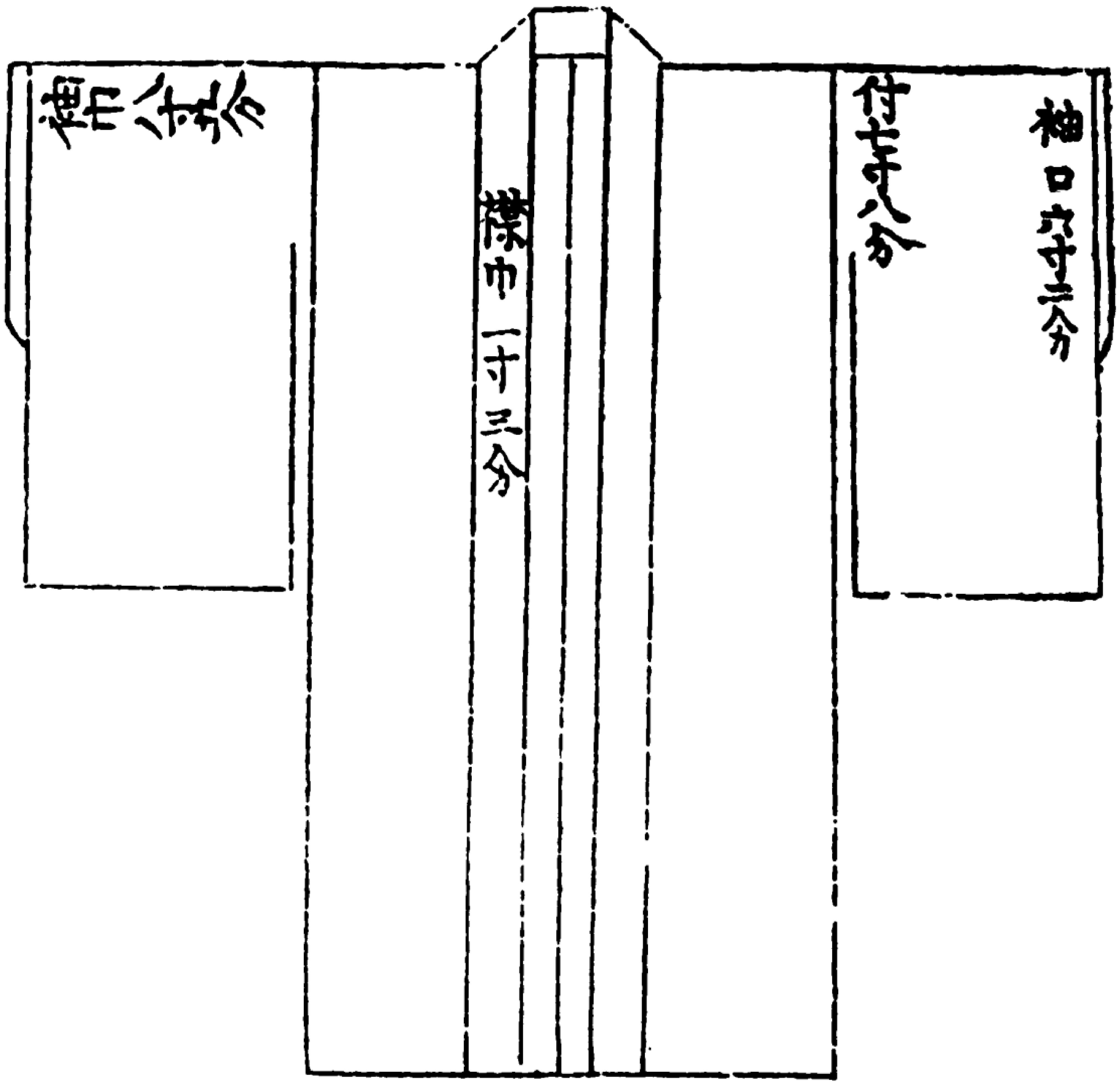
西山たい子

（二十）半纏の縫ひ方

先づ四袖をぬひ置き、表身衣及びうら身の、背と腋とをぬひ、丈を定め返りを見て、裏表合せて縫ひ、襟まはしより、眞直に襟をつけ、四袖をつけ、いつもの如くして綿を入れ、引きかへして絎るなり。

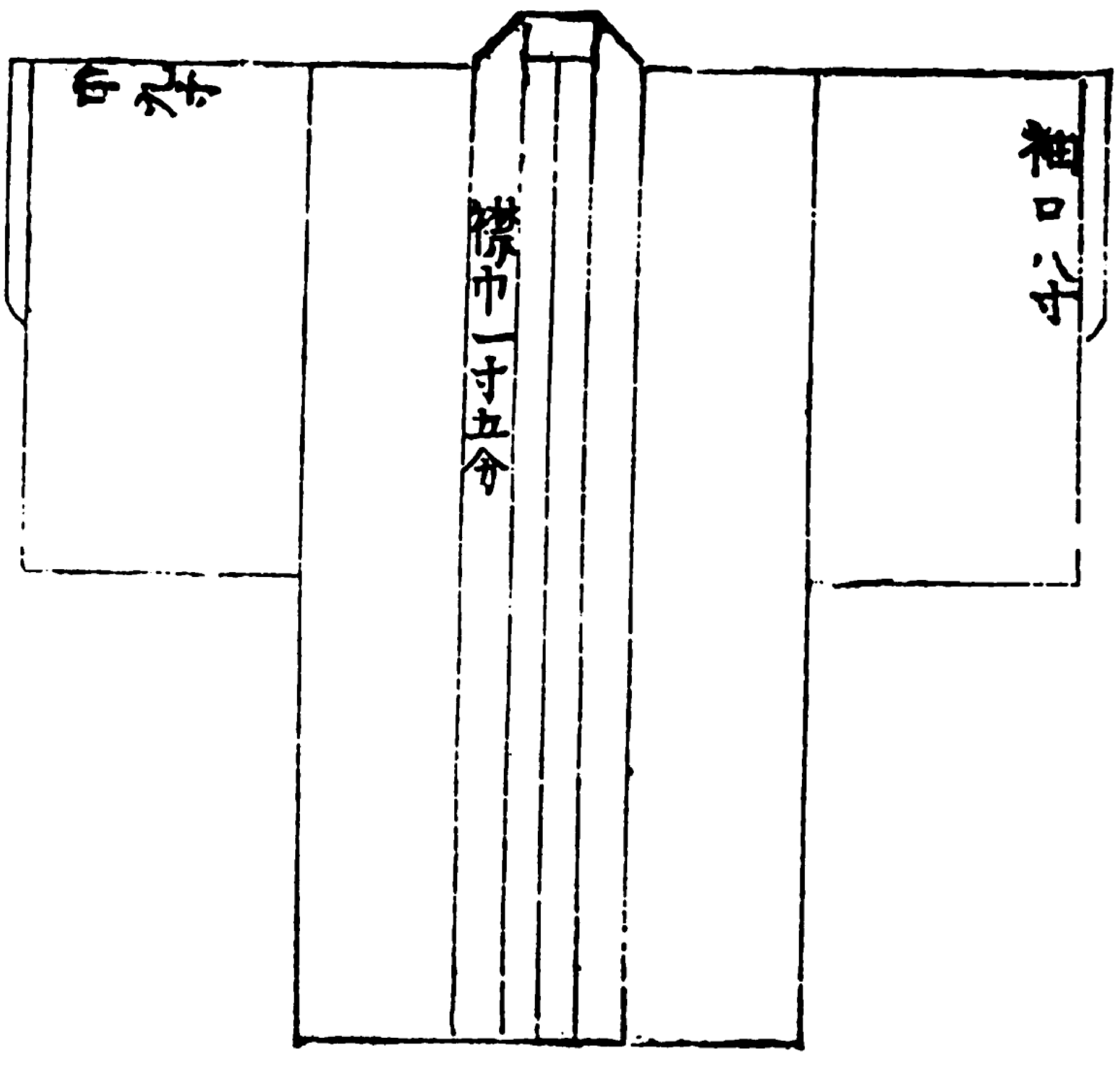
男半纏も女半纏も、縫ひ方は、同じなり。只寸尺及び袖付等のちがひのみなり。よろしく圖を見てわきまふべし。

（女半纏縫上り圖）

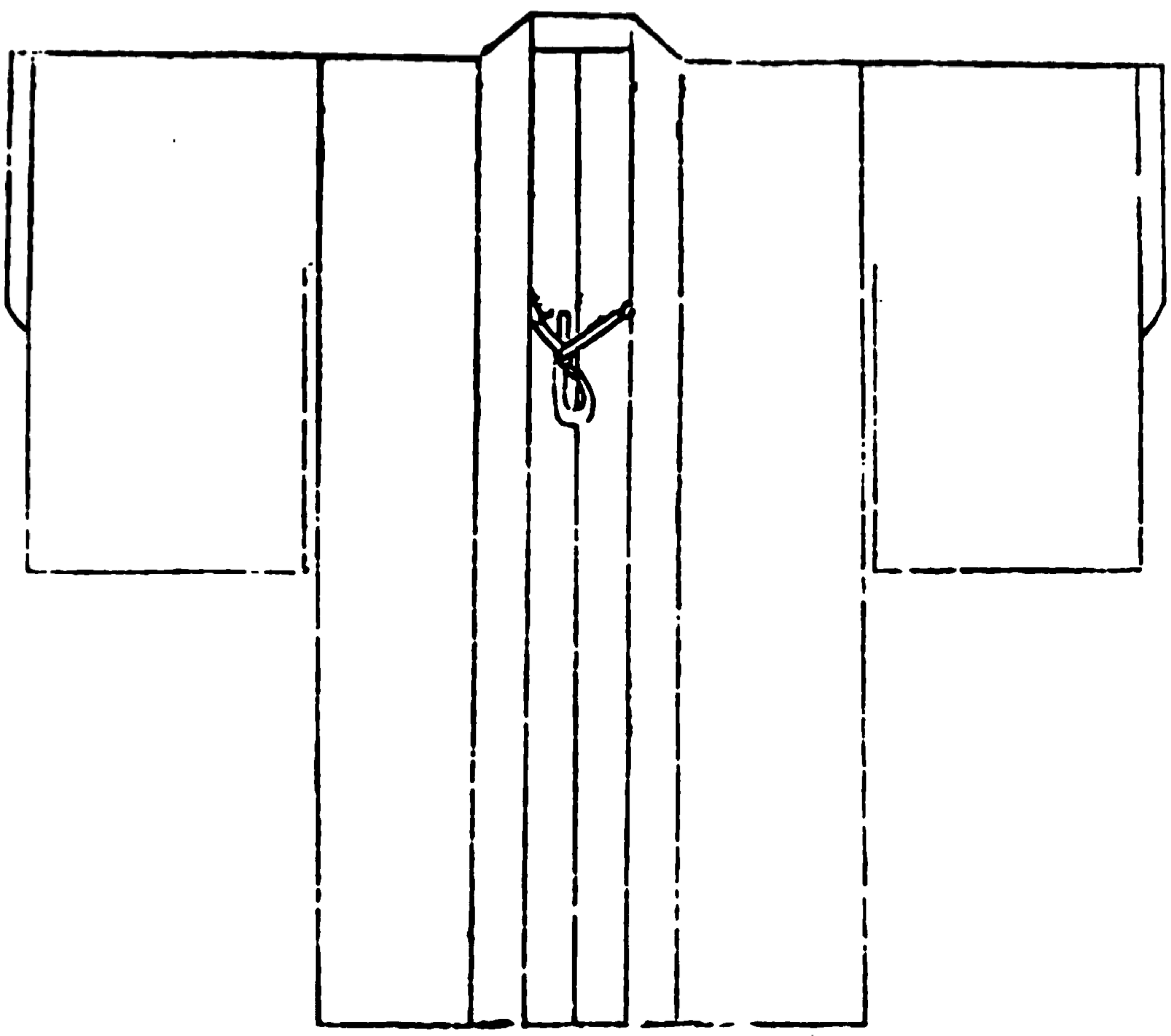


但し寸尺等は人によりて、随意たるべし。
また半纏羽織と云ふになさんと思はゞ、まづ例の如くに、四袖をぬひれき、身衣の背脇をうら表てぬひて、ひも付をはかり、よく前のぬひこみをはかりて、ちをつけ襟をも裏身衣につけ、例の如にして綿を入れ。ひきかへして、表身の方にて、襟をくけて、羽織の如くにかへすなり、前下りは、むつかしけれど、羽織のごきにとき明さん。

（男半纏縫上り圖）



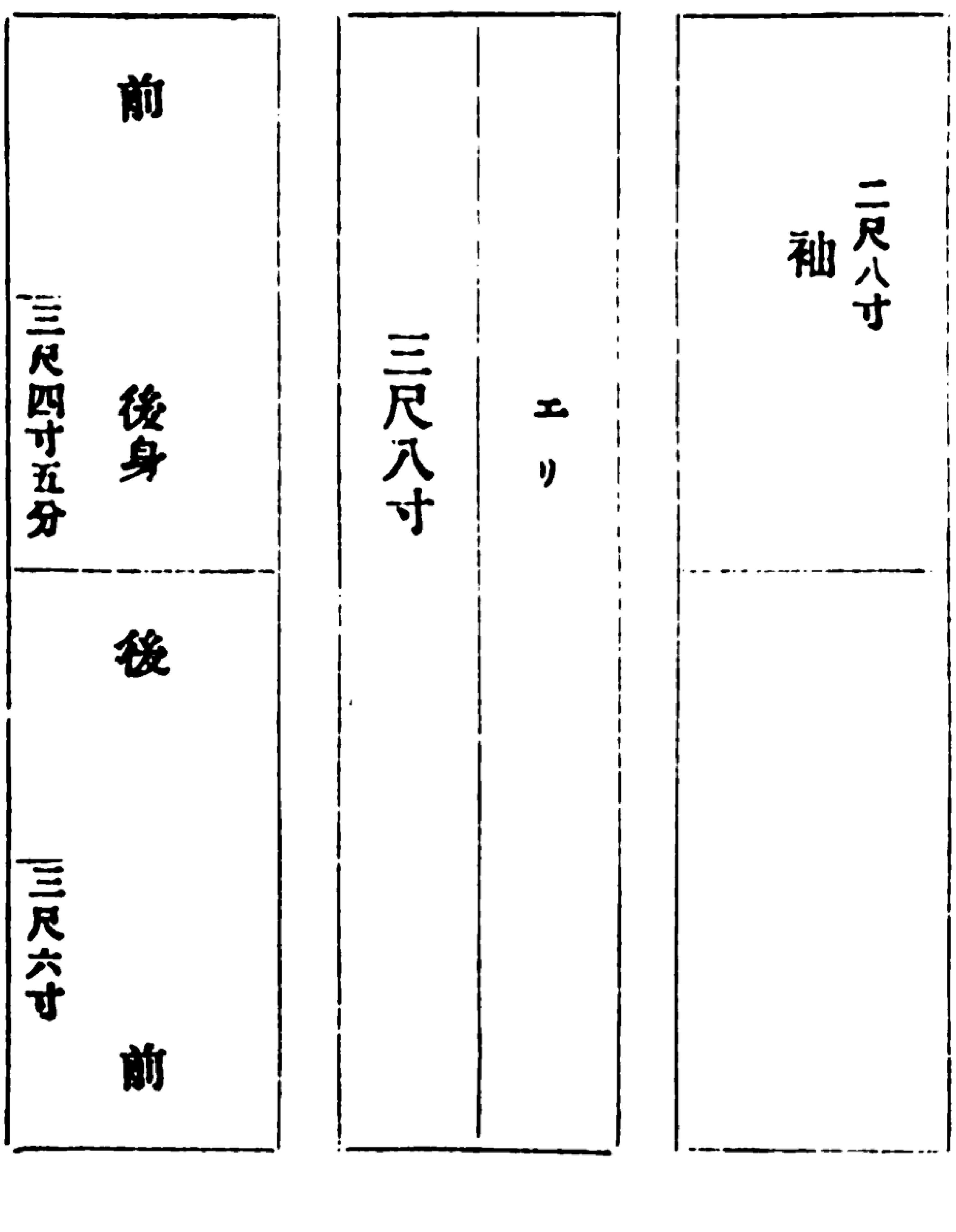
（半纏羽織縫上り圖）



寸尺等は半纏に同じ

（廿一）長胴着の裁ち方

長胴着は、大方二丈三尺五寸ばかりにて、出來るものなり。まづ袖をたち、次に身衣縫ひ上がりの丈を定め、其身丈けに、前下り及び衿まはしぬひこみ等を加へ、それをとりて二つ割にして、真直にてはぎ付けて、衿とし殘りを身衣とするなり。身衣を立つには前の方を一寸五分ばかり、長く、裁つべし、そは前下りをなすなり。寸尺等は圖にあり。よく見合すべし。裏身は、其縫上りの丈をはかり、かへりを見て、少しみじかく裁つべし。



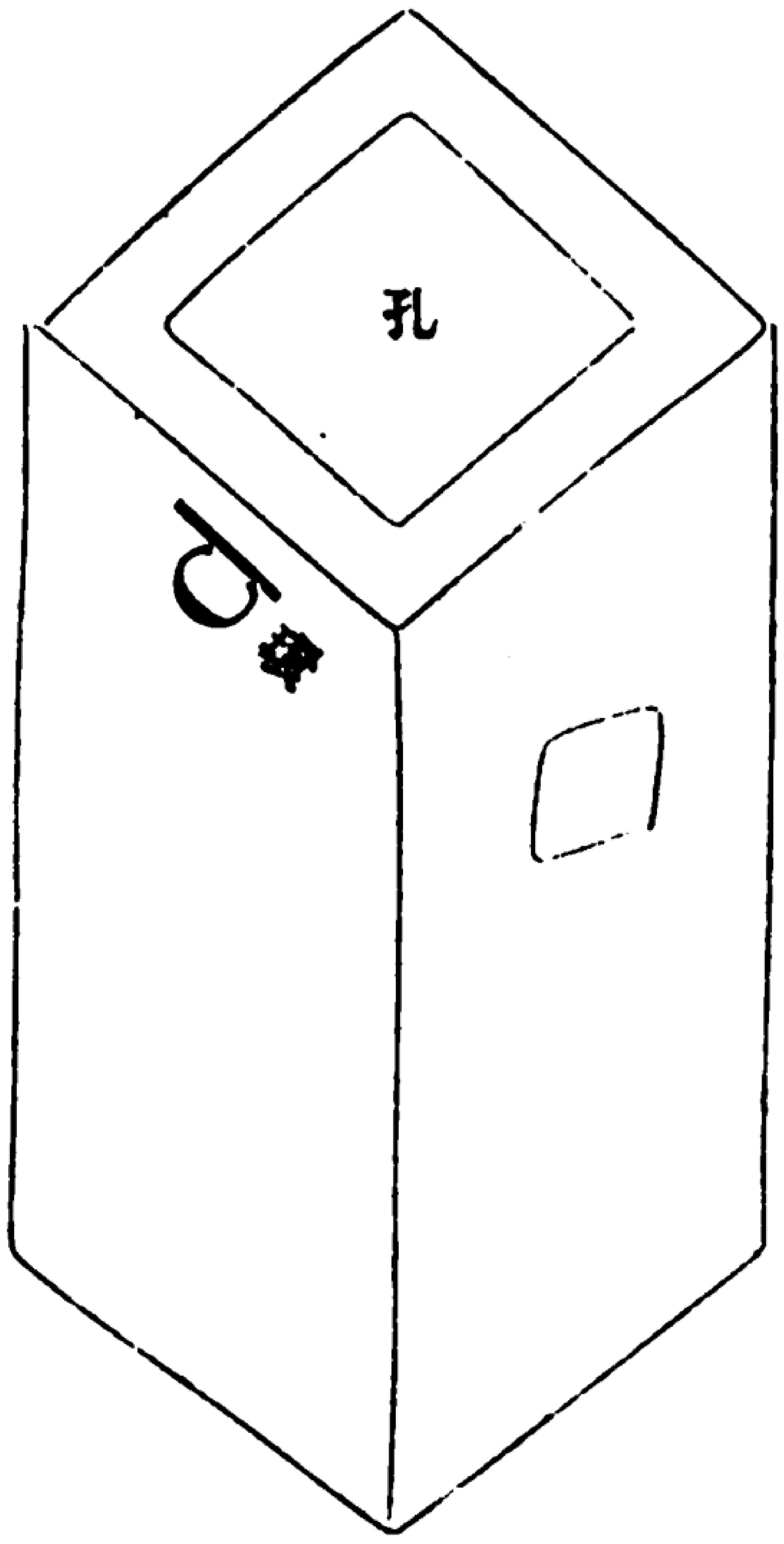
だいどころ

歌骨牌、トランプ扨ては、羽根打きの慰に、女わらべの集ふ折柄、手製の菓子にて、饗應も反りて、興味多からんと、菓子の製法一二を記すことゝせり。

カステイラ、

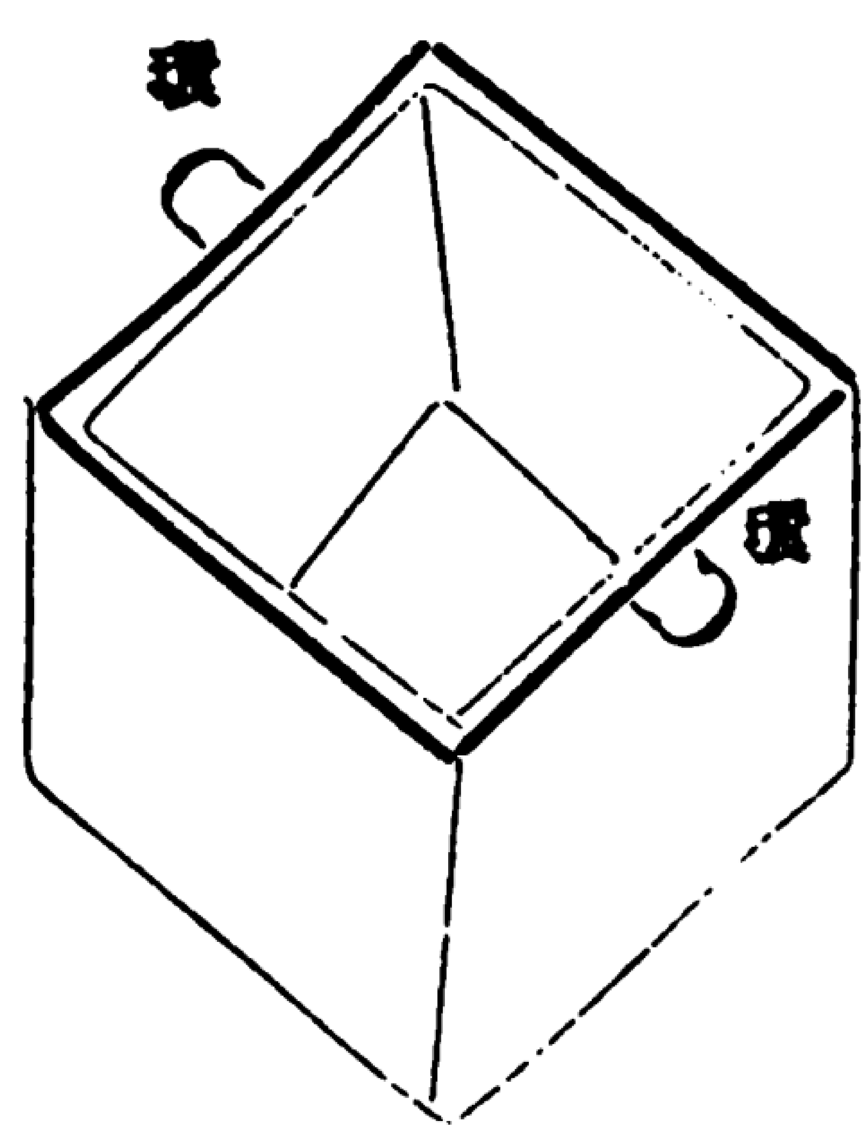
カステイラを製するには、先づ一個の道具を作らざるべからず、其道具は石油の明き函を用ひて、作るものにて即ち圖の如し。

甲圖



石油の明函の底を抜き去り、底と反對の面に縦横共に五寸五分程の孔を穿ち、又た左右の横側に一寸五分程の孔を穿つべし。

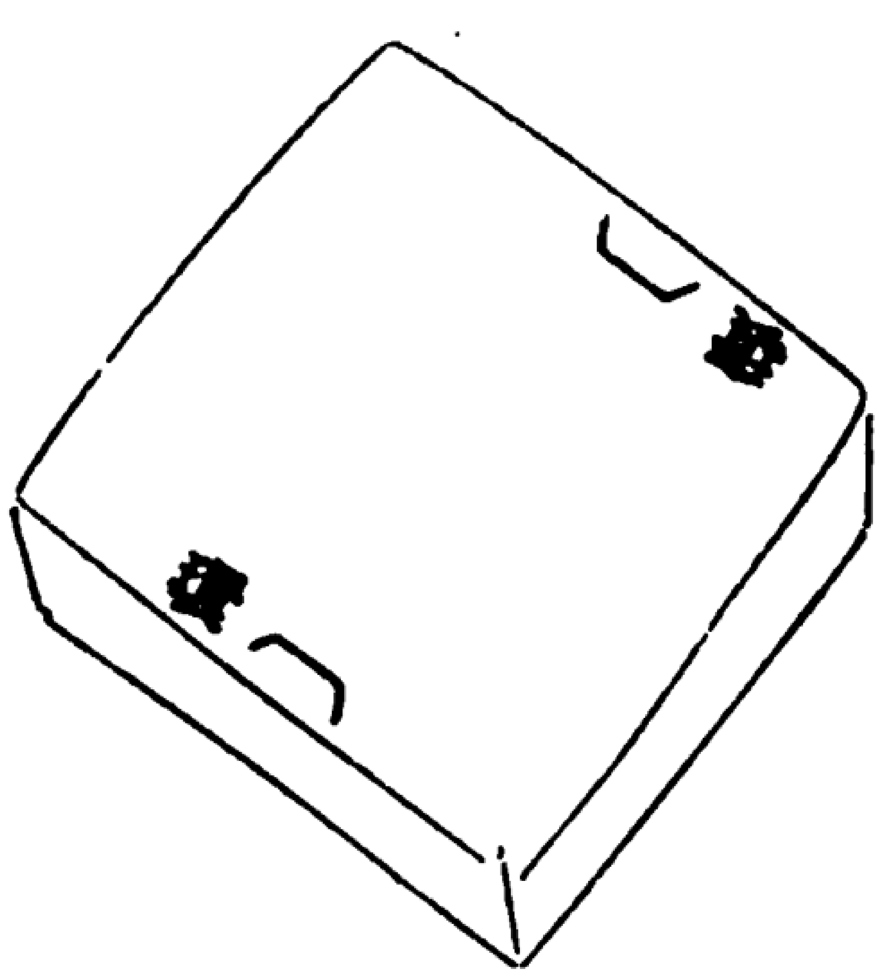
乙圖



馬口鐵にて、深サ三寸巾五寸程の一方口の匣に、四分程の縁を附けて、甲圖の上部の孔に掛る樣作るなり。

縦横六寸づゝに、深さ六分程の四角の盆樣の器の、左

丙圖



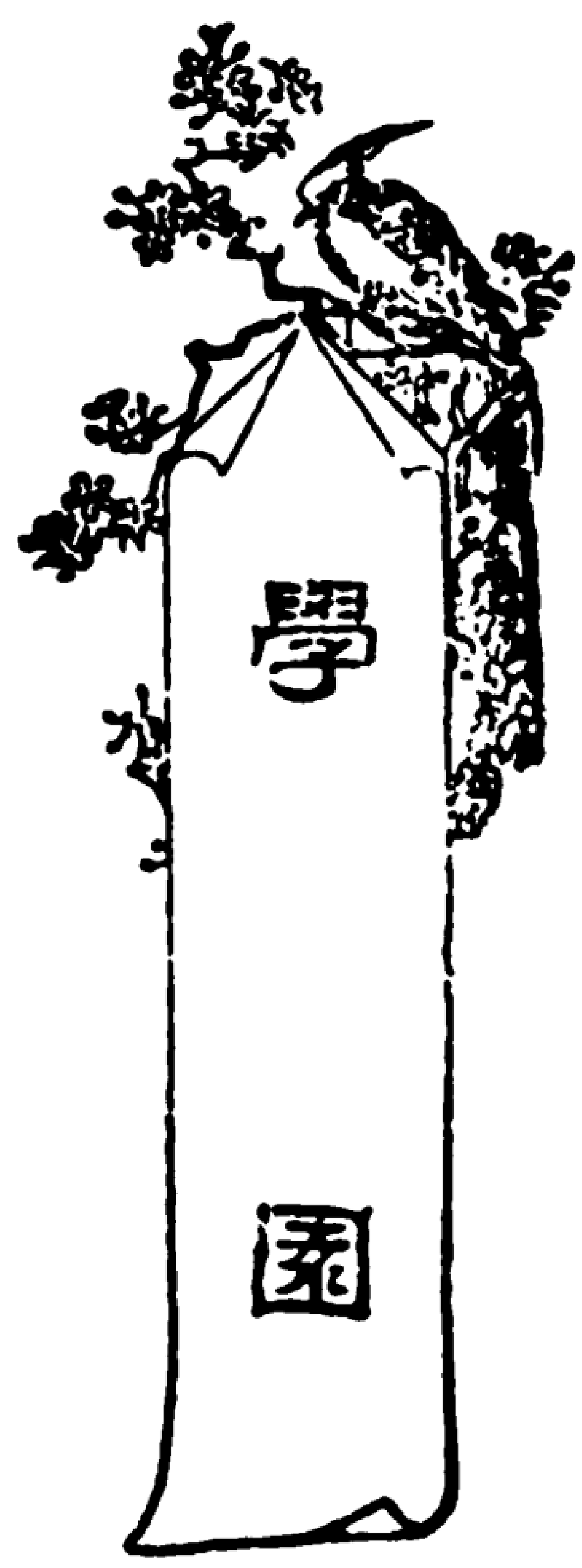
右に環を附けたるものを、馬口鐵にて作るなり。
扨て、右の器を用ひ如何にして、「カステイラ」を製るかを記さんに、雞卵六個、(圖に掲げたる器の大さに對する分量なり)の黄身と、白身と分ち、黄身は擂鉢にて少し擂りたる處に、砂糖八十匁を加へて、ドロ〳〵になるまで、好く擂り、其擂れたるを待ち、「メリケン」粉五十匁を加へ、別に前の白身を平らたき器に入れ、四五本の箸を束ねて、之を攪き回はし、其泡になりたるとき、之を前の黄身と粉に混和し、更らに好く攪交せ、扨て半紙を乙圖の器の底並に、横側に敷き、其中に右の混和したる汁を注き入れ上を半紙にて蓋ひ置き別に四角の火鉢に切炭、六つか七つ程の火を入れ、火鉢の上に、甲圖の器をのせ、其上面の孔に乙圖の器、(中に混和汁を盛りたるを掛け、又其上に丙圖の器を蓋となし、其上に灰を置き、火を入れて、上より暖ため燒くの仕組と爲すなり。故に上の火は初め強くして、後には弱くすべし。斯くて四十分間を經れば、「カステイラ」は出來上るなり。

蒸羊羹

小豆を煮て、(但水を度々取換て煮るべし)擂鉢にて擂り、水を加へて裏漉にて漉し、漉したる汁を布の袋にて絞り、別に砂糖に水を加へて汁となし、之に前の絞りたる餡を投し、之を鍋にて煮詰めて冷まし、其冷めたる處にウキ粉を投じて、攪き交せ、之を四角なる框に詰めて、蒸籠にて三十分間程、蒸すなり。但し分量は、小豆一升に、砂糖三百匁ウキ粉、百五十匁の割合とす。

このごろ　　鋤柄義子

このごろやう〳〵芹なども白ろむるなり。
くだもの諸木に肥などあたふべし、二月のころまでには二三度もほどこすべし。



日本文典（二）

鹽井正男

濁音の中なる全濁音のことに就きては、前々回に述べたるにて、大かたはさとり給ひてならむ。さて半濁音と申すは、其の數は五つあり

パピプペポ　ぱぴぷぺぽ

これも、また五十音の中なる「ハ」「ヒ」「フ」「ヘ」「ホ」の五音が變じて成れるものにて、「ハ」「ヒ」「フ」「ヘ」「ホ」の五音が半濁りて發する如き音なり。故に半濁音とよび、これを志るすにも、ハ行の五音を標する假字の右肩に小圈をつけて、これをあらはすさまは、右にあげたる如し。

この半濁音にも、全濁音と同じく、本濁といふべきと連濁といふべきとの二種ありて、其の區別は、全濁音の所にいへると同じなれど、詳しくは更にいはずてやまむ。たゞ此の半濁音といふは、我國の極めての古には非ず、本濁やがて本來濁りて發するものは、ぴん〱、ぷん〱、ぺん〱、ぽん〱、などやうに、唯音響を形容するばかりの語に止りて、極めて新しき世のものなり。或は我が國固有の音にあらずなどいふ人もあなれど、されどこれらは、慥に我國の音響をあらはす語にて、決して外國より來れるものとのみいふべからず。漢語をよむことによりて出來初めたる音にもあらぬなり。

半濁音の中の連濁といふべき類は、やがて二個の語を一つに連らねていはむとするやうなる時に、語の勢より、自ら次なる音が半濁るやうなるなり。例へば

はんぱく（半白）　けつぱん（血判）

れつぴん(劣品)　しゆつぴ(出費)
しゆつぷ(出府)　ひんぷ(貧富)
いつぺん(一片)　てんぺん(天變)
いつぴん(一品)　しゆつぽん(出奔)

みな斯の如きさまにて、これは固有の日本語の上にはあらず、漢語の入り來りてよりのことにて字音の上の一種の音便と稱すべきものなり。音便といふことにつきては、後にいふべき時あれど、こゝにいはず。

元來我國語の昔には、濁音が、語の頭にあらはれたることなり。ばら(薔薇)ごま(胡麻)などいふ如く、語の頭の濁りたるものは無かりしなり。薔薇は「うばら」、胡麻は「うごま」といふやうにいひたるなり。それが頭なる「う音」が略かれて、いつしか單にごま(胡麻)ばら(薔薇)などといふやうに成れるなり。昔にも濁音はありしなり、たゞ語の頭に濁音を有つ事の無かりしなり。あながちに濁音の全く無かりしやうに思ひあやまるべからず。

拗音

拗音とは、例へば「ちよくご」(勅語)、「たいしやう」(大將)くわんぱく(關白)などいふ時の「ちよ」、「しや」、「くわ」などいふやうなる音をいふ。二個の音を結びて、一聲に發する如き音なり。勅語(ちよくご)の「ちよ」は「ち」と「よ」とを別々に長くいふに非ず「ち」と「よ」とを短く一聲にいふなり。

此の拗音は、五十音の圖中に伊の段の音と也行の音と結べるものを「也行拗音」といひ、また五十音の圖中の宇の段の音と和行の音と結べるものを「和行拗音」といふ。也行のにも和行のにも「ギャ」「ジャ」「グワ」「グヱ」などの如く濁れるものあり。拗音は數多あるやう見ゆれど、實際言語上にあらはるものは極て僅なる如し。

拗音は、鄙俗の間には、父を「ちやん」といふ如き類

に、また鐘の聲を「じやん」といふ如き類に、これをきくあれど、大かたは外國語の入り來りてより、我國語の上にあらはれ初めたる所の音なり。拗音の事はそなはだむづかしき理屈あれど、さまでは用なきゆゑにいはず。

通音

ちゝ(父)をてゝ(父)といひ、はゝ(母)をかゝ(母)といふ如く同段の諸音が相互に轉じ、同行の諸音が相互に轉ずることあり。これを通音と稱するなり。「ち」と「て」とは同じく「た行」なり、「は」と「か」とは同じく阿の段の音なり。斯く同段同行の音相通ずるなり。

これに二種あり、則ち同行の音の相通ずるは、縱に相通ずるなれば、縱の通ひと稱し、同段の音の相通ずるは、横に相通ずるなれば、横の通ひと稱す。かゝる二種あるなり。

縱の通ひとは、或は單に通音とも稱する文法家あり、同行の五音は同音なり、その同音の中にて相通ずるなればなり。則ち「ア音」が「イ音」に成り、「イ音」が「エ音」に成り、「カ音」が「ク音」に成る如く、同行の五音の中にて、聲の相變ずるをいふなり。例へば男親を父(ちゝ)といふを、京都にては「てゝ」といひ、九州あたりにては「とゝ」といひ、陸奥にては「たゝ」といふ如く、所によりて、斯く言葉の訛りて、聲の變りたれど、皆同じく多行の音即ち同音の中にて、相變じたり。決して父(ちゝ)を「しゝ」といふやうには變ずることなし。

この縱通に四種あり。

第一は、衣の段の音が、同行なる阿の段の音と相通ずるものにて、縱通の中にて最多きものにて、此の通音は、二個の語を結びて一語と爲す時にのみ發するものなり。例へば。

さけ°(酒)　さか°たる(酒樽)　さか°や(酒屋)

さか°づき(杯)

すげ゜(菅)　すが゜はら(菅原)
わせ゜(早稲)　わさ゜だ(早稲田)
て(手)　たまくら(手枕)　たぶし(手節)
たなそこ(掌)　たなずゑ(手末)
ふね(舟)　ふなのり(舟乘)
なへ(苗)　なはしろ(苗代)
うへ(上)　うはかみ(上髮)
つめ(爪)　つまじるし(爪標)
あめ(雨)　あまみづ(雨水)
ひえ(冷)　ひやみづ(冷水)
かれ゜(枯)　から゜やま(枯山)
こゑ゜(聲)　こわ゜ね(聲音)

の如きものにて、酒は「さけ」なり。さるに酒と樽との二語を結びて、酒を入れたる樽といふ一物よむ、時は、「さかだる」といひて、「さけ」が「さか」と變せり。「け」は衣の段の音にて、「か」は同行にて阿の段の音なり。斯く衣の段の音なる「け」が、同行なる阿の段の音の「か音」に通せるなり。其の他も推して知りたまへ。

第二には伊の段の音が、同行なる宇の段の音に通じ或は同行なる衣の段の音に通じ。或は同行なる於の段の音に通ず。例へば、萬葉集十七の卷に

たびにいにし君しもつぎて伊め゜(夢)に見ゆ
わが片戀のしげゝれどかも

とある「伊め」は夢(ゆめ)と全じなり。また相摸集に

はや゜ち゜ふくしげみののらの草なれや
おきてはみだるふせどかたよる

とある「はやち゜」早風(はやて゜)のことなり。または「き゜の葉」が「こ゜の葉」、「ひ゜かげ」(火蔭)が「は゜かげ」などいふ類なり。

第三には、宇の段の音が同行の於の段の音に通ず。例へば萬葉集の十四の卷に

とやの野に乎佐藝ねらはりをさ〳〵も

ねなへ子故に母にころはね
とある平佐藝は兎（うさぎ）と仝じなり。或は
まるし（圓）が「まろし」
などいふ類なり。
第四には、於の段の音が、同行なる阿の段の音に通ず。例へば、しろいと（白糸）が「しらいと」、いろな（磯魚）が「いさな」、などいふ類なり。
古は阿の段の音にていへるが、後には衣の段の音によひかへられたるものいと多く見ゆ。それは「もたり」を「もてり」、「多かれど」を「多けれど」などいふやうに成りたるものをいふなり。以上述べたるが通音の内の縦通の四種なり

歌合壹番のつかひは左をまけさせぬ故實

下田義天類

歌合始めのつかひは、左かたをまけさせぬこと、判者の故實なりといへり。さるは此のつかひには御製若は一の人の作などを出すを常とし、さらぬ所のもやむごとなきわたりの人、若は時の宗匠のなどある習なれど、憚りて然せしなり、今は一の故實とはなれるなりとぞ、いと心得がたきことなりけり、さるはこの番ひ必しかあるべしと定めたらむには、勝もかちにあらず、負もまけにあらず。優劣は歌の工拙にかゝはらずして、其の位置によりて始より定まれるものなれどなりけり。よしあしをさだめんにかゝるよしなしごとをいひつゞくるは、道をそこなふものにあらざれど、上に諂ふえせわざとやいはまし。あらじ。上に諂ふにはあらじ。上を愚にしたるしれ業なりけり。始より勝つべきものと定めおきたらむには、勝ちたりとてなどか悦ばせ給ふべき。うなひごなりのたわふれすまひなどにてだに、かたへの翁たつもの、我必まけてとらす

べしとて、取組たらむつがひには、勝ちてもねやは悦ふべき。まして物の心をもしろしめしたらむみわたりの上をや。むげに口惜しき御さかとあなどり奉りたる上ならでは、か丶るいつはりごとをど、勸め參らすべきこと丶も思はずなむ。されど上に諂ひたるにはあらで、上をもてあろびたるしれわざなりけり。たとひやむごとなきみわたりのならむにてだに、よきはよしあしきはあしと、まげずつくらず正しく明かにことわらむころ、この道をさだむるもの丶まこと丶はいふべけれ。さてころろの勝負に御心も動かし給ふべけれ。ましてさしもあらぬどちの歌合などのをや。か丶ること故實として、後の世に傳へむは、この道の爲いと〱なげかはしきことなりかし。

此のことといつの頃よりか起りにけむ。歌合のはじめと傳へたる天德の内裏歌合に左方の勝ちたるは、其の歌まことによかりしがどなりけり。彼の折の壹番は

（題霞）

左　朝忠

くらはしの山のかひより春かすみ年をつみてや立ちわたるらむ

左　兼盛

故里ははるめきにけりみよしの丶みかきの原をかすみこめたり

といふなりけり。判者左大臣實頼公の判ことの葉に、左の歌倉梯山に年をつむといふこと宜し。又橋に渡るなどいふもさもありなむ。歌のふるまひさもありなむ。右歌などか故鄕にしも春めかしけむ。霞こめたらむもれろしげにや。此間只在二勅定一小臣屢候二天氣一遂無二左右一因以レ左爲レ勝といへり。よしあしはげにての判ことの葉の如くならずや。殊に作者も朝忠と有れど憚るべき際の人とも見えず。誠にその歌のよかりしが故にころ勝とはなされたるなりけれ。

亭子院の歌合にははじめのつがひを持と定められたり。之も後の世には右の歌勝つべきことと爭ひ難きをりに持とする由にいへれどこの時のは壹番（題初春）

左　伊勢

靑柳のえだにかゝれるはるさめは糸もてぬけるたまかとぞみる

左　是則

淺みどり染めてみだるゝあを柳の糸をぞはるのかぜやよるらむ

と言へる歌なりき、判言葉にも此の歌ども、是も彼も良けれど、持なりといへり。伊勢は憚るべき作者にもあらず。又右方必ず勝つべきほどの歌なりとも聞えず、誠に歌の位等しかりければなりけり。在民部卿歌合の時、左の勝ちたるも勝つべき歌なりしからに、勝ちたるなりけり。陽成院歌合の時、左の勝ちたるも、又然り。長元八年にせさせ給へる賀陽院小閣歌合の時のは、稍心しらひありしものゝごとくなれど、之を能く讀み味ふるに左の方勝りたる所おほし。皆そのをり〳〵の歌を味へて察すべし。煩はしければ今こゝにはもらせり。さて長久二年にせさせ賜へる弘徽殿女御の十番歌合をみるに、此折のはさだかに負としたり。其の一番（題霞）

左　相摸

はるのこしあしたのはらの八重霞日を重ねてぞ立ちまさりける

左勝　侍從乳母

春は猶千くさににほふ花もあれどおしこめたるは霞なりけり

といへる歌なり。判者大和守義忠朝臣の判言葉に、霞の春の景色は吉野の山のあたりにて、年頃みなれて侍れど、げに定め增し侍りぬべきを、このあしたの原ひと所に八重よりも增りて、立ちそふと侍るはあし。か

く許の會のこゝろいふせう見え侍り（意義不明）大方に萬をも押込めたらむことさる事と思ひしられ侍れどいへり。これらを思ふに此の頃まではさるよしなし古實はいまだ古實とせられざりしこと明なり。

之より七十餘年の後、永久四年に六條宰相家にて、歌合したることありけり。所謂六條宰相家歌合これなり。此の折はじめて此の古實のより所ともいふべき心はえを書き載せたり。さるは其の折の始のつがひに

（題子日）

左　　源俊頼朝臣

春日山ふもとの小野に子の日してかことを神にまかせてぞみる

右　　修理大夫上

子の日する野べの小松を諸ひとの君がよはひにひきかくるかな

とありしを判者修理大夫顯季卿これをことわりて曰く、左の歌言葉づかひなだらかならず。又子の日の松をさし置きて、神にことよするも惡しかるべき事ならねど、今日のことには叶はずや。又松といふことあらまほしくぞ。右の歌はめづらしき事なけれどなびやかなれど勝とは申すべけれども、左の壹番などは憚りれもう賜へられて持とや申すべからむとろかゝれたることの憚りおもう玉へられてといふことよりあやまり傳へて、後世古實の如くとり成したるか。若然らむ是をや其の據といはまし。されど此の判詞はしかいはねたゞあるまじきゆゑよしありて、ころいひつれ。さるは此の番左方の俊頼朝臣はこのをり前の木工頭なりし故にさまで憚るべき際にはあらざりしかど、歌の道にとりては判者より先輩なり。右の歌は判者みづからの作なり。同輩の歌なりとも、みづから判者の位にありては、己まづへりくだらむこと、世の常の道なるべし。ましてこの先輩とつがひたるをや。同をり十五番卷軸

のりがひも、俊頼卿と判者みづからのとなりけり。其の判詞にも何ぞともいはで、又左右のうた……いたはることわりていそぎまかりいでぬれど……とかきさしたり。これも同じ心ざしなるべし。顯季卿の用意みる人深く味ふべき所なりかし。之をよくもたどらで、そのまゝ口うつしにせむはくひせを守り柱に膠せむとする判者なるべし。されどこの六條宰相家歌合はその據とすべきものにあらず。

之より先承暦二年の内裏歌合に、左の歌には難ありて、右の歌には難なくはた歌がらも右の方勝れるやうに記して、判をそのうらうへにしたり。これを據とすべきか。こも又胡椒丸吞といふべし。そは此の折の日記かきたるものは右方の人にてあながちに左をおとさむとしたるゆゑのさかしらわざなりけり。この折のははじめのつがひのみにあらず。全篇十五番にはかた右をのみほめ罵りて、左のれひとりよかりたるやうに見ゆれど、歌がらをくらべ味はふるに、必しも日記にかゝれたるやうにも見えず。又判者が左方にてあながちに左をひきたるも憎さげなり。すべてこの折のは右左共に正氣の沙汰とはおもはれずなむある。このはじめの番などは、歌がらはげに右の方や勝りぬらむ。さるを左に勝せたるは例の判者の偏執なり。かたて打なり。故實など思へる樣にあらず。是等をかり初に見過して良からぬ歌のかちたるは故實ありしが爲なりとやうに、心得むは中々に眞相をみあやまりたるをこのわざとぞいひてまし。

偖猶こゝにいはではあるまじき一例あり。そはかの顯季卿の爲に殆うしなはれなむとしたる名譽を僅につなぎ止められたる俊頼卿の判者となりし時の、他の歌をことわりたる一例なり。この卿は顯季卿の判詞をげにさることとあらむと思ひとりたるかはた外に思ふよしありてか。崇德天皇の大治三年二月永緣奈良房の歌

合に、此の卿ろの判者となりて左を必ず勝すべきものゝやうに明言せられたる其の折の壹番は（題櫻）

左　大納言君

深山にはしもと風をきはやけれどふもとの花はことし咲くめり

右　中納言君

散花をさそふとみつるはるかぜのうはのそらにも捨てけるかな

といへる歌なりき。判者是をことわりていはく、左歌はしもとがさをれなど云々、右歌めづらしきふしも見ねず。ことなる難もなきにや。されどことの外ならぬかぎりは左をがたすることなれど以左爲勝といへり。これ後の世に誤を傳へたる始にや。されど俊頼卿ほどの人にてみだりにかゝることをいふべくもあらず。おもふに必ゆゑよしのありつることなりけむかし。これよりさき關白内大臣家歌合の時には壹番の右方判者みづからのなりしさへ、二所まで勝と定められたることありけり。この左方は俊頼卿にて、右方は基俊卿なり。このふたりが其のかみかたみにいどみあひたることは淸輔の袋双紙などにて、おもひやるべし。誠にみぐるしきまで中のあしかりしとぞなり。基俊卿がわれだけく思ひあがりてみづからの歌をみづから勝と定めたるも憎さけなれど、俊頼卿の常に彼の人をもときいひたるゑりうことも聞きにくきこと、いと〳〵れはかり。さる中なるに關白内大臣家にて催されたる晴の歌合に二所までおへなく打負かされたることなれど、是等の怨情を下心にもちてのしわざなどにもや。かにかくにこの一例は後の古實沙汰の據ともなさぞなりなむかし。然はあれどもまた同じ折に同卿の判にて、左を負けさせたる所あり其の一番は（題郭公）

左　大納言君

時鳥榎のとはがり待ちつれどなかでおけぬる夏の夜の

ゝめ

右勝　　中納言君

郭公鳴くうれしさをつゝめども袖にはこゑもとまらざりけり

といへる歌なりき。これをことわりて、左歌はとはかりといへる言葉は只ごとしと申す詞にや。さらでも心さしなくもや。あくる東雲とよめるは曉方より待ちろめけるにやと聞ゆ。郭公を聞かぬ歌ふるき歌合にその數みゆめり。されど聞きたらむ歌の閑長ならむには如何侍らむ。右の歌別によからねど歌めきたり。など勝さらむと判じたり。同口よりいでたる聲のいまだ消えやらぬほどに、こは抑なにごとなりけむ。自語の相違もあまりとやいはまし。こは同じく、一番は一番なれども、卷頭ならねどよしとみたるにや。作者も前の一番と同人なり、つがひもはじめのつがひなり。若くはことの外なりとみたるにや。げに歌は右の方まさりては見ゆれど、ことの外といふまでにもあらざめり。既に判者も右歌別によからねど、歌めきたりといへるにあらずや。殊の外とおもはざりしこと、この語にて證すべし。されど前の判詞は判者まさしく然か思ひとりたることゞもうけひき難くなむ。よし俊賴の卿はひとり然か思ひとりたりとて、人のうけひかざることをぞいかゞはせむ。ましてこの卿みづからも外におもひいれありてかくはいひすてたるげなるをや。されど此の奈良房歌合もかの故實の據とはすべくもあらず。

以上につらねあげたる例は皆其の據とはいひ難きこと、既にこれをいひ盡したり。此の外にはかの故實の據とも思ひ合すべきこと絕えてしらず。おのが見聞の足らざるにや。若もこの外にたしかなる出所あらむ世の同好者よ、敎を垂れ賜へ。疑ひて後眞理を得るは學者の常なり。若此の外に出所なしとすれど、此の故

實といふことは彼の六條宰相家歌合と永縁奈良房歌合とを取りひがめて、承暦の内裏歌合などに思ひよせ能くもことの心をたどらむともせでえせ判者の物識り顔にいひいてたることゝや定めむ。

今此のあげつらひをとじめむ爲にあまりに煩はしきやうなれど、今ひとつの反證をあげむ。さるはこれら歌合の後即近衛天皇の、久安五年六月、中御門亭にて合せたる歌合のなり。所謂右衛門督家歌合これなり。この折の判者は左京大夫顯輔の卿なりき。この折のはじめのつがひは（題秋月）

左　　右衛門督家成

秋はなほあまたの星の見えぬまでいかでひとつの月てらすらむ

右勝　　前齋院兵衛

秋の夜はあまの川瀬や澄みまさるながるゝ月のことにみゆるは

といへる歌なり。この判詞に左の歌月の明げに侍れども、あまたの星ひとつの月などころ歌言葉とも見え侍らね右はすみまさるといへるはどぞさゝへたるやうなれどもきゝつきて侍り。如何なれど星みえぬまで照る月に天の川せの澄みまさるらむと判じたり。彼の顯季俊頼の二卿のことわりて後にも、猶かく左方のまけと定められたること、正しく物に見えたり。此の餘にも猶あまたありぬべけれどさまではとて、深くはたどらず。彼の弘徽殿女御の十番歌合といひ、この歌合といひ、皆左方の負を定かにことわられたるは、故實をしらざりし判者といはむか。苟も時の判者たらむほどのものにて、さどかりのことわらむを、いかでか知らざらむやは。これまたくろのかみには、さるよしなしごとはなかりしが爲のみ。よしたしかなるより所あらむにてだに、あしきをよしとしよきをあしとし正邪曲直所をかへしめむ掟はこの道のわざはひをなすも

のなれど、こゝろあらむものは、其の非をならすべきことなるを、まして其の出所より所は既にあげつらひ盡したるごとくなるをや。かへすかへすもおのれをあざむき、上をもてあそび、この道をそこなはむとするよしなし故實はすみやかにやぶらまほしうなむ。こは いたづらに古格を破らむとする新語法家新體歌連中の顰にならはむとするたちろきにはあらずぞかし。

――――

（水屋集）

いつこより
さしはこねけむ
ひむかしの
やまのしらゆき
あさたにもなし

漫録

親に事ふる者のたしなみ

故人　仲丈敬甫

人の子となり、よめとなる者は、その身をわたくし物とせず。故に身を親のためにつくして、つゆおのがためにかへりみず。凡そよき事あれど、わがし出せることにても、みなおや〳〵の善となす。若し、あしき事あるときは、さうなく、みな我身にひきうくるなり。身すら心にまかせずは、さて身のほかに何物か有るべき。よりて、いさゝかの物をも、わたくしにもたず。又何にても人にかしあたへうけ入るゝ事、おや〳〵に申さずして、ひとつもわたくしにせず。もしゆるされ

て、おくりものする時も、必ずおやの仰せといひそて、やるなり。又よめの方へとて、人のくるゝ物あらば、何によらず、みな、しうと、しうとめに奉るべし。それをうけ給はゞ、うちよろこびてやむべし。もしわれにかへして給はゞ、さらに物たまはりたるやうによろこびて、納め置き、しうと、しうとめの、みの物なき時をうかゞひて、またこれを奉るべし。もし又我れや、はらからなどへ送りたく思ふことあらば、必ず、しうと、しうとめに乞ひうけ、許されて後におくるべし。これみな巳れをわたくしにせざる心なるべし。

野邊の若菜

松竹居主人

この篇は、上杉鷹山侯治憲侯の第四女、於祇の方の高家、畠山飛彈守へ娶入らせ給ふ時に、示したまひしものなり。先に老の心、桃の嫩、千歳の基など次々かゝげつれど、是も捨て難くて、寫し出ておくり參らすになむ。

こたび江都へ趣かるゝに付ては、心の扣にとなりなむ事ゞ、書記して參らせよとの、中の殿より乞れし、元より疎意にはあらねど、前に姉達へ申示せし冊子其の外、古人の女訓、女誡の書ども、年頃目馴給ひしなれど、舅姑夫君への事へられ方は、盡し事、今はた衰老の身の見及び聞及びし事も、いつしか遺忘せしめ、我身さへ無覺束なり行き侍れど、拙き筆を染るとも、何一つ益をなさむことも有まじけれど、中の殿の請と云ひ、姉達へは申參らせ、御身のみ殘さむも本意にあらねど、左に記し侍る。

一人は分に安むずるといふ事第一也。分とは我身の生れ得たる分限也。安むずるとは、夫々に分限に安むじ、外を羨み願はぬ事なり。凡天地の間にあらゆる物は、皆天地の氣數に洩たるはなき也。其の氣數を

得る上に、窮通得失あり、是稟受のはじめに、おのづから分限有て、數の一定して移すべからざるものにして、呼て命となすなり。其の天地自然に稟得たる氣數の外を、羨み願ふとも得べき事にあらず。外を願ひ羨む心から、却て稟受たる氣數の福分を失ひ色々の禍も生じ來る也。人倫の上においていはゞ、王侯貴人と生るゝも有り、匹夫庶人と生るゝも有り禽獸草木に至る迄、皆其の如くにして、鴻鵠の大鳥あれど、燕雀の小鳥有り、王侯貴人は匹夫庶人を治めて匹夫庶人に養はれ、匹夫庶人は王侯貴人を養ひて、王侯貴人に治められて、其の職分を失はず、鴻鵠は江湖に游泳して、飲啄時を失はず、燕雀は堂宇に飛翔して、乳哺時を違へず、千尺の松柏は、數年の綠を含み、數寸の草花は、一時の榮を發して、皆其の受得たる氣數を以て、一生を過しぬ。天地は所謂栽るものは培ひ、傾くものは覆すにて、皆其自然に任せて、夫々に惠を施され、彼に厚く、是に薄きといふ事にはあらざる也。然るを我が氣數をしらず夫を恨み、人をかこちなど、天理に背きて、天の御心に適ふべきや、天の御心に叶はずして、福分を得べき道理はなき事なり。參姬はいふも更也、お貞の方は、三万石の小諸侯に嫁せられ、お信の方は、三十万石の大諸侯に嫁せられ、御身は三千石の高家に嫁する、お貞の方は三万石の氣數を得られ、お信の方は三十万石の氣數、御身は三千石の氣數を得られ候事、是皆人力の爲す處に非ずして、自ら定るものなり。本より父母の上に、彼を厚く、是を薄く、といふ事やある、本より父母の心にては、皆一樣にとこそ思ふべけれども、其の身〳〵の生れ得られたる氣數は、父母とてもいかにせむ。譬へていはゞ、人身の長短ひとしからぬが如し、此の理を得と心に會得し給ひ、分に安むじ給ふ事、肝要にて候。富貴を

去たび、貧賤を厭ふも、止事を得ぬ人情なれば、万々一も他を羨み、不足の心をいだかる丶妄念毛厘も心の底に存在せば、御身終身禍の根となりて、受得られたる氣數の福分を失はる丶事出來るべし。恐れ思ひ給ふ事ぞかし。唯有生の始に受得られたる氣數を守り、我身の程を知り、謹愼の心弛まず、身を修め行を琢き給ひなば、夫が即ち福となりて、終身安案に受得られたる氣數の福分を失はず、行末目出度子孫も繁榮ある事疑なければ、此の分に安むずといふ事常に心に存し守り給ふ樣、有まほしき義也。

一古人の言遺し、女を嫁するは、吾か家に勝るべし。吾が家に勝れば、女の人に事ふるに必愼み、必戒しむ、婦を娶るには、必吾か家にしかざるべし吾が家にしかざれば、嫁の舅姑に事ふるに必婦道を盡すといへり。然るに、御身は今大家より小家に嫁し給ふなれば、此の儀いよ〳〵愼しみ思はざるべき事ならずや。男は陽にして貴く、天の道也。女は陰にして賤しく、地の道也。天道にていへば乾始りて、坤生じ、陽は歳功を主どり、陰は助けて歳をなす、人道を以ていへば、夫は一家を主どり、婦は佐けて家とゝのふ。去ながら婦は美善ありとても、含みて晦し、其の助くる事も夫に隨ひて、其の功を主どらざる事、地道の天に代りて物を脩成し、功は天に歸するが如し。婦人は何くまでも、物柔にして人に隨ひて、専制の義はあらざる也。若大家を後楯にして、舅姑夫君への事へられか、又家中へ對しても驕泰の色顯れば、恐れても憚るべきことならずや。昔の賢き女は、天子の姫宮として、臣下へ嫁せられしも、猶舅姑に事へて、婦道を盡されしぞかし。先方の慈愛深き程、彌増卑退恭順に處せられ、何事も先方の家格家風に隨はれ、陰陽の貴賤姑婦の

尊卑夫妻の唱隨、天地自然の道理たる事、朝夕聊も忘れぬ樣に存まほしきなり。

一大家大祿の夫人ともいはるゝは、自方家格も重く重けれど、出入も難く、他への往來も易からず。小家小祿の奥方の上は、家格も輕く輕けれど、出入も易く、往來も難からずされど、御身の事は、必櫻田へ參らるゝも、姉達よりはしげ〴〵にて、兩奥への親しみも深かるべく、此の段は幸の事ぞかし。唯其の出入の尤易きより、人々も爰の物見、彼處の遊山と、勤むるもの也。追々には名たゝる名所、見物も可然なれど、女子は晝は庭に遊ばず。門を出れば面をおほふといへり。窈窕たる奥深く、物靜かなるをこそ、女徳とは言ふなれ。本朝の女訓にも、年若き婦女のしげ〴〵宮方詣は誡め置れたり。地の德は柔順なれども、又直方大也といへり。直とは正しく固きをいふ。方とは其の容の定り有るをいふ、大とは其の德の限りなきをいふ。其の如く、女は人に從ふ習ながら、又節操の違はぬ男女の別の正しき塲に至りては、動されぬ守あるを貞女とはいふなり。南に有喬木休息すべからず。漢に有遊女求むべからず。漢の廣き泳べからず。江の永き方すべからずとは、木影の休息すべき道あれども、今其の枝葉の高き故、止息すべからず、川には水底潜りし筏にのりて渡し得るの道あれども、今二水の廣き永き故に渡るべからずと、賢女の流水の邊に、出遊しける人、禮を犯して求むとすれども、女の貞潔なる故に、求むべく近づくべからざるを、譬へていへる詩なり。五代の王凝之が妻は、李氏の女也。家貧しく一子猶幼かりしに、李氏其の子を携へて、旅行せし時、開封といへる處の旅舍に止まらむとしけるに、旅舍の主人、其の宿を許さゞりしに、日既に暮て行くべき方もわらねど、去りかねて居たりしを、主人其の臂を引て

出す、李氏天に仰ぎて歎して曰く、われ婦人として、節を守る事能はずして、此の手人に取らる、一手の故を以て、身を汚すべけむやとて、斧を以て自ら其の臂を斷じてけるとかや。是等情慾の事にあらず、甚しきに過ぎて、中道にはあらねど、斯程の志にあらざれど、操は立通されぬ物ぞとの敎に、世々の女訓にも引ける也。遊山翫水しば〳〵に及べば、人となれ近づきて、思はぬ恥辱にも逢事ぞかし。舅姑の慈愛深きより外、出の勸めもあるべけれども、しば〳〵の事はこらへ忍ばれ、程よくして愼み深くあらまほしきなり。

右三ヶ條、今度出府に臨み、申進し侍る。此の外。婦言、婦德、婦容、婦功、より女訓の條々は、姉達に示せし冊子に粗申せし事、又櫻田兩奥の敎戒も、有るべきなれど、今更同じ事言ひても煩しけれど、省きぬ。彼と是と、取合せ、比考ありて、萬分の一益とも成など、老の歡何かは是に過ぎむ、といふ事しかり。

文化十二の年中春吉日

己を知り人を知る

大林弘一郎

すべて、人の世に在りて、日常人倫の道をふみ行はんとするには、必わが身ひとり立たんと思ふべからず。我が身ひとり立たんと思ふ心あるは、畢竟、よく我が身の分限を知らざるものなり。

かく謂はゞ、論者、必、いはん、「我が身の才能智識ともに、みな、人々に勝れたればこそ、人の上に立たんとはするなれ、いかで、人に劣れるをば、曲げて勝れたりと思ひ誤りて、人を凌ぐことやあらん。さるを、身の分限を知らずなどいはんは、誠に、人を誣ることの太甚しきものならずや。」と。

世には、或は、さることも、ありなん。されど、余よりこれを觀れど、しか信ずること能はざるなり。何となれど、只、我が身あることを知るのみにて、他人あることを知らざるものなればなり。

人、もとより、獨にして立つことあたはず、必、類をもて群するなり。これを人倫といふ。既に人倫ありて、この國に居るもの、いかで、其の相互の間に行はるゝ情誼なかるべけん。この情誼をして自然のまゝならしめんには、また、必、偏する所あり、僻する所もありて、公平ならざることといふを待たず、故に之を節して、其の程をよくはかり、過不及のなき所に歸せしむるもの、これ即ち禮なり。

されど、禮ばかり、人間に要用あるものはあらじ。この禮をよく行ふを、よく人倫にまじはるといふ。おのれの便よからんことを思はゞ、先、他人の便よからんことを思ふべし。おのれの困難を覺ゆる時は、かならず、他人の困難を体し察すべし。何事にまれ、すべて世の中のありとあらゆる務は、みなこの人と人との間に起る要事ならぬはあらじ。されど、おのれひとりよくとも、他人に害あること多き時は、その事をなし遂ぐべからず、これ悪事なればなり。たとひ、おのれに少しく便ならずとも、多くの人の喜ぶことは、これをなすに後るゝことなかるべし。これ善事なればなり。

おほよそ、かゝる理は、まことに、浅はかなることなれど、誰人もみなよく知れる所なるべけれども、つら〱世の中の人々を察する時は、この義理をさとらざるがいとも多きなり。いかなる故に、か程のことわりを明め知らざるかは、余の解しがたき所なれども、兎に角に、このまゝにては、人情も、義理も、次第々々に薄く暗くなり行くことのいとも、著けれど、慷慨さに堪へかねて、いさゝか一言するなり。

世の人々、ことに、女子としては、もとも、本題にか

〻げたる己を知り人を知るといふことをよく味ひて、みな〳〵その自身の分限をよく知り、人を憐み、または、敬ひ、常に人と已とを比較し、喜怒哀樂みなともに、その程を失はずして、中らひあしからぬやう心せらるべし。已を知るとは、已の善き所もあしき所も餘れる所も足らぬ所も皆、一々よく〳〵調べて、殘る所なきをいふなり。人を知るとは、已の身の上に引きあてて〻その利害得失好惡是非をも、みな体見するをいふなり。已の欲せざるを人に施すことなかれといへる旨をひろく深く考へ見ば、かならず、過つことなかるべし

おきの玉藻（三）

永石德文

少年にて、師にあひて物を習ふには、朝は師に學び晝は朝學びたる事を勤め夕はいよ〳〵かさねならひ、夜は、伏して、一日の中に口に云ひ身に行ひたる事をかへり見て、あやまちあらばくひて、後のいましめとすべし。

たれもよく知りながら、こをまことに行ふものまれなめり。こゝろとゞむべきわざにこそ。

（兩葉支鑑）

師の教を受て、學問する法は、善を好み、行ふを以て常に志とすべし。學問するは、善を行はんが爲也。人の善を見ては、我身に取て行ひ、人の義ある事をきかば、心にむべなりと思ひかんじて、行ふしべ。善を見、義をきゝても、わが心に感せず、身に取用ひ行はずは、むげに志なくちからなしと云ふべし。我學問と、才力と、勝れたりとも、人にほこりて、自慢すべからず。言にあらはして、ほこるはいふに及ばず。志はいつはり邪なく、まことありて、たゞしかるべし。心の内はれはくくもりなく、裏表なく、純一にて、青天白日のごとくなるべ

し。一點も心の内に邪惡を隱して、裏にもてあるべからず。志正しきは、萬事の本なり。身に行ふ事は、正直にして道をまげず。邪にゆるめる事を行ふべかず。外に出てあそび居るには、必常のしるべき親戚朋友の所をさだめて、みだりにあなたこなた、用なき所にゆかず。其友として交はる所の人を撰びて、善人に常に近付、良友に交はるべし。善人に交はれど、其善を見習ひ、善言を聞、我過を聞て、益多し。惡敷に交はれど、早く惡に移り安し。必友を撰びて、假初にも惡敷に交はるべからず。おそるべし。朝には早く起て、親につかへ、事をつとむべし。朝寐しておこたるべからず。およそ人の勤はあしたを初めとす、朝居する人は、必おこたりて、萬事おこなはれず、夜に至りても事を勤むべし。早くいねて、事をおこたるも、用なきに夜ふくるまで、いねかつてにて、時をあやまるも、ともに子弟の法にそむけり。衣服を着、帶をしたる形とも、とゝのひて威儀正しかるべし。放逸なるべからず。事々に朝學べる事をかさねぐ、勤ておこたるべからず。心をあらくおほやうにせず、つゞまやかに、少しにすべし。かくの如く、日々に勤めて、おこたらざるを、學文の法とす。（同上）

＊　＊　＊

世のみだるゝは、いつとても男女のみちたゞしからざるよりおこれり。人々のいへることなれども、まことにしる人すくなし。（たはれぐさ）

＊　＊　＊

山科のかたはらに、たわざするおやこありしに、道ゆく人金のいりたる袋をおとしおけるを、其子たかきをかにかけあがり、よびてかへさんとす、なに事ぞととふ、しか／＼とこたふ。おとすもひろふも、世のならひなるに、いらざる事にかまひて、わがたわざをすつるぞといひけるとなん。この人は、荷黃丈人のたぐひ

なるべし。　（同上）

むかしより、秦の始皇の事を論じて、とほくおもんはかるものを、妖言とし、直言するものを、誹謗するといへり、かくありては、その國いかでかほろびざらむ、されどかゝる事を、もじのうへにて見れど、めづらしき事のやうに、おぼえ侍れど、世のおろかなるものは、いまもしかなり。人の家には、いきしに病苦、又は水火のうれひなど、必ずある事なれど、あらかじめそのそなへなくては、かなはぬ事なりといへど、いはふかどには福來るとこそいへ、目にも見えぬ、いまいましき事なのたまひそとて、をうなわらべの、はらたてのゝしるは、とほくおもむはかるものを、妖言とするなり。又かゝる身もちにては、道にもあらず。人のおもはくもいかゞといへど、わるくちいひて、人をはづかしめ給ふといひ、なきかなしむにいたれり。これは直言するものを、誹謗とするなり。いたましきことなり。

今も世にありがちのことなり。深く心すべし。　（同上）

世の中ほど、おもふやうならぬものはあらじ、たからは國のいのちたるをしらざる人は、みだりにつかひすてゝ、代々のたからをもうしなひ、又たからは國の本たるをしれる人は、やぶさかにして、たからさへあらばと、おもひて、世のありさまあしくなりゆくをしらずと、或人かなしみてかたりき。　（同上）

あぢはひ深く感かぎりなし。

甲冑堂

貫堂子

こは橘南谿翁がものせられたる、東遊記に見えたるを、本號史談にちなみあれば、とりいでてのせつ。

奥州白石の城下より一里半南に才川といふ驛あり。此才川の町末に高福寺といふ寺あり。奥州筋近年の凶作に、此寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ、僧も不住明き寺となり、本尊だに何方へ取納しにや、寺には見えず。庭は草深く誠に狐梟のすみかといふも餘りあり。此寺中に又一つの小堂あり。俗に甲冑堂といふ。堂の書付には故將堂とあり、大さ纔に二間四方斗の小堂也。本尊だに右のごとくなれば、此小堂の破損はいふまでもなし。やう／＼に椽にあがり見るに、内に佛とても無く、只婦人の甲冑して長刀を持たる木像二つを安置せり。いかなる人の像ぞやと尋るに、佐藤次信、忠信二人の妻なりとかや。其昔義經、鎌倉殿の義兵をあげ給ふを聞、秀衡にいとま乞して、鎌倉へ趣き給ふ時、佐藤庄司が子の次信忠信を御供に出せり。其後義經京都へ攻登り、平家を追落し、一の谷八嶋などにてさばかりの大功をたて給ひて、再度奥州へ來り給ひし時、はじめつき從ひて出たりし龜井片岡など皆無事にて歸國せしに、次信は八島にて能登殿の矢先にかゝり、忠信は京都にて義の爲に命をれとし、兄弟二人とも他國の土となりて形見のみかへりしを、母なる人かなしみ歎きて、無事に歸り來る人を見るにつけて、せめては一人なりとも此人々のごとく、歸りなばなど泣沈みぬるを、兄弟の妻女其心根を推量し、我が夫の甲冑を着し、長刀を脇ばさみ、いさましげに出立、只今兄弟凱陣せしと、其俤を學び老母に見せ、其心をなぐさめしとぞ。其比の人も二人の孝心をあはれに思ひしにや、其姿を木像に刻みて殘し置しと也。嗚呼兄弟の人は古今ためしすくなき忠義武勇の士なり、其人につれそひし婦人、又希代の孝女にて、夫婦忠孝の勝れしも世に珍らしき事なり。余此物語を聞、此像を拜するにそゞろに落涙せり。かくばかり人の鑑ともなるべき孝婦の像の、かくあれはてたる小堂の雨

風をだに防ぎかねて、彩色も落失せ僧だに守らで香華を供ずる人も無く、年月に荒れ行きつひには跡かたもなくなりはて、是等の事をも語り傳ふる人もなくならんを、誰ありてあはれといひて、一錢の參物をだに供ずる人もなきは、世には忠孝に感ずる人のすくなきにや、あまりにあはれに覺へしかど、委敷書付歸れり。

夢判じ

鹽井ふく子

一富士、二鷹、三茄子とて、これを正月二日の初夢に見たるものは、よき運來るなど、昔より云ひ傳へて、寶舟など云ふものを、賣りありき、買ひさわぎ、枕の下に敷きて、うち臥しなどするものゝあるをかしさよ。如何なれど、此の夢を見たるがよろしきにや、きけどもさるが故と、知りたる人もあらず。いでや今年の夢のよの、ねでと初めにもとて、うちあんずるに、さても、をかしき事のうかび出ぬ。あたれるや、あたらざるやは、こを見そなはさむ方々にまかせて、思ひうかぶまに〳〵、あさはかなる水莖にまかせて、書きつくれど、われながらあやし。

一番に富士の夢みんをめでたしといふは、そも富士山は、我が日の本にて、くらぶものなくいと高きものなれど、かゝる高き夢みんは、心いさぎよけれどにて、たぐへんものもなくめでたしといふ心ならむか。次に鷹はうゑとも穗をひろはずとかいへど、孔子渇すとも盗泉の水を飲まずとの意に、よく似たる事にて。鳥ながら聖人の心持ちたる者故に、夢にだも聖人を見しは、めでたしといふ意にて、鷹の夢よしといふならむ。そが次に三茄子といふは、茄子の音は、やがて、美をなすと云ふ事に通へど、夢にもよき事をなせど、必ず善の報ひありて、目出たしと云ふ意にやあらん。此の三は上なき夢とせり。その外、なほ、天に登ると見れど

大によし、然れどもつゝしむべしとなり。こは天に登るほどの高き心を、持ちたらんは、いと〳〵よろしき限りなれど、徒らに位をのみ高うせんと思へど、よからぬ道にもふみまよふなり。されど、つゝしめよと云ふならむ。また田畠を耕すと見れど、富貴となると云ふ。之は身を紛にしてはたらきだにすれど、貧乏は、追ひつかぬもの故との心より、はたらく心をもつ人になくど、かゝる夢は見じと思ひての事より、かくは富貴になると云ふならん。又金錢をひろひしと見る時は反て思ひがけぬ損失あり。落とせしと見れど、中々にまうけありといふは、誠によきいましめなり。ひろひしなど見るは、常に强欲にわかぬ心のあれどにや、夢にさへ欲深きを見るものなれど、さやうの人は、遂にはあるまじき非道の行ひをも爲すやうの事あらむ故に、あしきしるしと云ひしならむ。又落とせしと見たる方は常に大切に氣遣ふ故なれど、過はなからんとなり。また歯のこぼれたると見る時は、親を失ふ事あり、よく〳〵用心すべき由を云ふ。こは大事の事なり、歯はよはひと云ひて、父母は、齢の高きもの故に、かく云ひしならむ。又男子はさる事はなけれど、女子は、鏡のこはれたる夢を、見たらむには、大凶なりと云ふは女子は、鏡を、たましひにかけて、大事に成すべきもの故、その鏡の損じたるなどを、見るは、必ず身にくらき事、心にかけたる所の、あれどなりと云ふならん。入浴したると見など大によし。多くの病をのぞくなりとよ、不潔は健康に害あるもの故、かゝる夢を見る人は、きたなきを、つねに、いとふ人なれどころ見るなれと、いふよりよしとするならむ。また物を食べし夢を見るときは、多くは病來るとは、之もまた食をつゝしめよとのいましめか。夢とまで食する事を見る人は、必ず大食家ならん、故に脾胃を損ずるならんとの心より云ふならんか。此の外にもなほ色々のをかし

き事の、あるやうなれど、忘れたり。すべて夢は、五臟のつかれと云ひて、常々心に思ふ事、爲す事を、多くは見るもの故、心淸ければ、夢もおのづから淸く、心きたなく、わだかまりあれば、夢もまたいやしく、おそろしき事を見るなり。分けて女子は、心せまければ、あしき事をなさじよなど思ふときは、やがて必ず夢みるものなり。故に夕べ〳〵の夢につけても、朝な朝な、已が心をかへり見るべき事よ。よき夢を見るは心のよきなり。心よければ必ず、善の報ひありと云ふ心より、出でたるいましめとなるべきものなり。故にあしき夢を見し時は、南天と云ふ樹を見よ、萬のまがつみを消すと云ふ。南天は生れかはると云ふ事に當りて、心を入れかへよとの敎へならん。そはいつぞや、我が父母の外に、ありがたき人なる、三輪田先生が、詩を講ぜられし時「南方歸去再生天との句に付きて、佛の法に、南方は火に屬して、虛無の地なりと云ふ事ありと、の玉ひしが。今此處に思ひあたりてなむ。

都の新年

小青菴主人

千代田の宮の松が枝にさはる風もなくて、鶴夢とこしなへに穩かに、みかは水の色よろづ世に碧にして、龜のあそぶさまも、いとのどかなる君が御世も、はたちまりこゝのつの年をむかへて、とよさか昇る朝日のかげに、日の丸の御旗、映發して、國のひかりも、いとあかるく、はやうら〳〵と霞立ちて、何となう春めきぬ。うちの御有樣、かけまくも、いとかしこし。大禮服とやらいふものつけたる文武の百官、あるは馬車に、あるは馬にのりて、櫛の齒をひくが如く相連り、劍佩の聲、相和して、都大路に一種の花をかざるが中に、額に創負ひたる軍人の酒を帯びてねりゆくも、こたびの

いくさに、國の爲にたゝかひたる人かとなつかしく、よろづ戰捷の餘光を帶びて、いつの新年よりもにぎはへり。八百八街、いたる處として、國旗のひるがへらざるはなく、門松に竹さへ添へて、賤が家もひかりを添へぬ。朝とく起きいで、日の出を見る人もあるべく、朝食には、屠蘇酒飲み、雑煮餅たうべて、君が代の春をいはひ、新年の禮にとて、人の家にゆくもあれど、來るもあり。あるじまうけには、數の子、まめ、ごまめなど三組にもり、なほれせちといふものをそなふるを、例として、下戸にも、屠蘇の酒をすゝめ、日頃うとくなりたる人も、新年に



は互ひにゆきゝして、舊交更に睦ひの酒と共にあたゝまりぬべし。午の刻すぐる頃には、おとづるゝ家の數もかさなりて、酒やう〳〵めぐり、あふさくるさの人の醉顔、國旗と相映じて、いとをかし。追ひ羽根とて女子のすなるを、町家にては、番頭、子僧など打ちまじりて、到る處の大路に、五人、六人、あるは十人つゝ、あつまりて、羽根をつき、となりの人にまはして、もしうけそこなひて、羽根をおとせば、羽子板もて、腰をしたゝか打ち、又は墨にて顔をくろ〴〵とぬるほどに、いとうるはしき娘兒もにはかに物凄き顔となり、もろともに笑ひどよめくなど、いとのどかなるさまなり。男の子は寒き風をいとはず、水鼻たらしつゝ紙鳶あげて、大空一面にうなりの聲、なりわたり、とびゆく鳥もしづ心なし。くれかゝるほどに、路ゆく人はゑひどれのみ多くなりまさり、蹌々蹣跚として、一歩は高く、一歩は低く、小舟の波にたゞよふが如く歩みつゝ手うちてめでた〳〵とつぶやくも、いとをかし、れよろ、新年には、親しき家には、座敷にのぼりてことほぎをのぶれど、あまり親しからぬ家には、手札を玄關におきてかへるなり。中には自からゆかずして、他の人のついでに、手札をたのみて、もちゆかするなど、近年虚禮の香りぬるも、また是非なしや。謹賀新年の端書いたづらに多くして、郵便脚夫のいそがしげなるも、いと心苦し。かくて、夜に入りぬれど、到る處の家々に、男も女もうちつどひて、百人一首のかるたとるも、多かるべし。歌骨牌に女なきはをかしからず、男なきもをかしからず。心熱するあまりに、他の手をかきむしるまでに打興するなど、新年のたのしみの隨一なるべし。新年のいはひは三日間をかぎりとし、七日には七草のいはひあり。十五日は十五日正月、二十日はまた二十日正月とていはふなり。

神路山の大瀧

安藤紫光

秀麗なる神路山は高く聳ち、清冽なる五十鈴川は清く流る、共に浮世の塵のかゝらざる所、大御神の大御稜威と共にとこしへに犯されざるべきなり。この山の水この川の石、いづれをかしからぬはなく、とり〲に幽れたる趣深し殊に山深く入ること二里ばかり、五十鈴川の水の源ともなれる大瀧こそ世はなれたる響いちじるしけれ。さるは日光諸瀑の如き名高きものにはあらず、那智布引の如き目覺しき際にてあらず。只山の靈なると、水の神なると、うちあひてたゝずまひ何となうゆかしく、心の塵の拂はれぬべき樣なるのみ。

此の處殊に秋の紅葉色ふかしと聞けり。かねていつしかとは思ひわたりつゝ、かれ是さはることありてえものせざりき。今年こそはと心あへる友とちさそひていてたちぬ。

先千汐の色を鳩口にながめ、とほくゆはたと山の紅葉をのぞみて、さて、切り開きたる新道より下ざまに河をわたりて、蘚の細道をわけゆく。深き苔の緑には露の花さき、れはひかゝれる梢には、紅葉映えたり。あらはれたる岩角ふみなやみがちにたどりゆくに、飽なせる大石三つ四つ川の中らに横はれる所にいでぬ。飽石とは是をいふ名なりけり。對岸高く聳えて絶壁削りなせるが如く、その下には石に激する水白くわきかへれり。頭をあぐれば、杉の緑の影に紅葉色こく、見おろす淵には、水青くして藍の如し。この天然のいみじき景。浮世の人に見せましかばなどかたらふ。なほゆきゝて鏡石にいでぬ。千年の巨石苔深く鎖して今は影もやどらず、只ところ〲纔にろの光のあらはるゝのみ。あはれ塵の世の影、うつさじとにかあらむ。此處より此道は、日の光さしかはりて、秋の日もあつき

をおぼゆ。道をふさげる木々をひらき、頭白き尾花おしなみ、上り、下りつ、川を横ぎりて新道にいで、しばしして又谷間に下りぬ。南より來る水、東より來る水はこの處にてあひ、北に向ひて流れゆくなり。その南の流をわたり、東の方は溪にそひて遡るに、水やう〳〵おちたぎちて、石多くいでたり。石をふみて、あへぎ〳〵ゆく。さしかはせる紅葉の色のゆく手の木の間にかゝれる、まばゆきまでならぬが殊に所がら似つかはし。猶木の間をわくること數町、石ます〳〵大きくして、ながるゝ水は所々に小瀑布をなせり。そこにしばしとやすらふ程、耳にきこえたるは瀧々激々の水の音なひなりけり。いざや瀧の近きぞと友の叫べば、勇みたちていそぐに、音なひいよゝ近くなりて、淸氣膚をおそふばかりになりぬ。やがて木の間がくれに見えそめたり。紅葉のかげに白き色のほの見えたるは望の夜の月を山の端にまちつけたらむ心地のせられて、嬉しさいはむ方なし。瀧の下近く立ちよりてながむるに、絶壁の上より生ひいでたる楓樹は、今まさに紅をそめ、幾十の梢は、相參差して天をおほひ、しみたてる常盤木につらなれり。織りなせるその錦の中ほどより、一條の素練は世の濁りにしまぬ色にかゝりて、淸くすめる瀧壺に入る。瀧の水はおつるが如く、落ちざるが如く、動かざるが如く、動くが如し、只瀧壺の湧きかへるを見るのみ。うちむかふ心はこれに奪はれて、身をも世をもわすれ、我は是仙境にあるか、魂は既に天界に遊べるか、と思はれて、耳には瀧の音なひのみあり。紅葉ちらす風にやう〳〵驚きて、我にかへれば、身は猶もとの我なりけり。ながめやる瀧のわたり、常に五彩の飛雲生ずるは、山神のめであそぶ所にやあらむ、衣衫のしめやかなるは、瀧のしぶきにぬれてなるべし。山氣膚にせまりて、夏の頃のいかならむとおしはからるゝにもゆかししばし紅葉の木

の下に尻うちかけてながめやるに、いつまで見てもあかぬ景色なりや。梢より落ちたる紅の色のかれこれ青き水にうかびて流れゆくも、いとよくをかし。下より見あぐるのみならで、上より眺めおろすも、また一しほならむと右手の方より荊棘の路を上る。木々をたよりにせむとすれど、朽ちたる枝は折れやすく、くづれたる石はふみしめがたくして、足元もさだかならず。松の大木のたふれたるをよぢ、岩の下をくゞりて、這ふさまにて生ひ茂れる草ふみしだきつゝ、やう〱溪流のほとりにいでぬ。これやがて瀧のながれなりけり。溪流折れて瀧となるところに立ちてながめおろせば、一條の水は幾十の玉となり、輾轉して下れり。岩にあたりてはくだけ、くだけてはまたちる、ちりたるもまた玉をけづりなして、おもしろきながめいひしらず。

いくたびかくだけ〱てちる玉を
なほぬきとむる瀧の白糸

これもまたいつまでもあくまじかりけり。見おろしつゝわりごひらきなどして、この所より見はるかせば、前山の緑かすかに紅を點せる姿めでたく、遠く見ゆる諸峰のさま、またをかし。殊に脚下に一面紅を敷きつめたる如く、濃き淡き相交りて秋の色ふかき紅葉のさまいひしらず。かくてあらむには、心のびやかに、氣もはるけて、千代もふといふ仙人の境にすめらむ心地もせらるべし。この靜けき山の奥、この水の清き色、共に浮世の塵にけがれぬもの、世はなれて獨潔き所、秀麗なる神路山と、清冽なる五十鈴川との造形れる天然の神境にして、都門萬丈の塵もこの處には及ばず、濁世の浮薄人士の夢にも入り來らぬ所なりけり。只清き心に神聖なる山水をめづるものゝ入ることを許すのみ。

今日一日、この山水の境にあそびて、目をぬぐひ、耳、

をあらひ、心を清め、げに身邊一ひらの塵をもとゞめざるが如し。歸り來りて靜にゆふげしたゝめ、ゆあみしてさて眠りぬ、こよひ夢魂飛びていつれの所にかむかふらむ。

筆のすさび（六）

たけを

月夜に釜をぬく

常に云ひ馴れ、聞き馴れて、何とも思はぬことの、さて其は如何なることか、とたゞし見れど、容易に解きがたきことすくなからず。此頃ふと「月夜に釜をぬく」と云ふ諺の意につき疑ひをおこして、とやかくやと思ひめぐらせど、是ぞと云ふべき考へも浮ばず口惜く歯がゆく思ひ居たりしかど、一日親しき友どち、これかれうち集ひて、何くれと語り合ひたる時、ふとこの問題をもち出したり。

小兒もよく知れるいろはたとへの「月夜に釜をぬく」と云ふは、そも如何なることの譬へにや。

とうち出せど、

げにげに其はよく聞く諺よ。されど其の意はいかにや、知らず。

といふ人多し。もの知らぬは、我のみにもあらざりけりと思ふうち、或一人のとき出すやう。

其は全く、至極の油斷をたとへたるものなるべし。其の故いかにと云へど、まづ月夜はいと明かなるものなれど、人目を忍ぶ盗人の身にとりては、極めてたより悪き夜なり。云ひ換ふれば、盗人に物など盗まるまじき時なり。また釜をぬくとは、釜を竊より拔き取ると云ふ事なり。かく云はゞ、物も數多かる中に、殊更釜をとり出でたる故はと疑ふ人もあらむが、そこには味のあることぞ。釜の一言にて何れの家にとりても、一日も欠くべからず、さしわたり

極めて、大切なるものを知らせたるこそ、いと〳〵面白きなれ。さて思ひて見給へ。盗人の入りがたき月夜に、盗まるまじき釜を拔き取らるとは、まことに至極の油斷にあらずや。

と鼻うごめかしつゝ語る。いとしたり顔なりや。

げにうまく解かれたり。されど其にてはぬくといふこといかゞ。思ひても見給へ。ぬくとぬかるとは月とすッぽんとのけぢめあり。月夜に釜をぬかるとあらむころ、君の說にも從はめ。ぬくとぬかるとをとり違へたるは、もしくは君のぬかりにあらずや。いかに、

とすかさずつきこめぬ、

もしくはさも有らむ。されどかやうのものにはあながちに頑しき文法にて押し通しがたきこと多かり。論より證據、けしかると云ふべきをけしからぬと云ひ馴れて、怪まぬにあらずや。角をこめて牛を殺すと云ふこともあり。されど余が說とてあながちにけしからぬことゝうち消しがたし。

と云ひつゝ煙草くゆらす。

こはけしからぬことを聞くものかな。文法論は、さて置くとも、ぬくとぬかるとのけぢめは、誰が耳に誰が聞きても、明かに知らるゝものを。こじつけにも程こそあれ。さはあらずや。君等はいかに、

とてあたりを見まはせど、今まで頭傾け、腕こまぬきて、居たりし一人の友、この時やう〳〵とじり出でて、靜に口を開きたり　（つゞく）

みきゝのまゝ

玉散里

月讀の宮にとのゐせし朝、とみれどあなたの杉の木のまより頭まろくそりたる人共見ゆ。かみ長なめりとおもふに、皆杖もて道を探りてくるをみれど、三人の目

ゑひが宮にまふでんとするなりけり。一人みそぢ餘り、他のふたりは、五十六十の老の坂のぼりそめたる程にや。稍斜なる道たど〳〵しげに下りきつゝ、漸く御影石の手水ばちさぐりえて、口すゝぎなどす。手してかきなでゝ「よき石かな」などさだめあへり。盲人鼎を許すといふこと思ひいでられてをかし。

かくて、石はらのわたりまで、ゆきて足駄ぬぎ、もたる杖など下におきつ。まさに御前に進まむとす。若きひとり「杖なくては便あしかり。もちて行かずや」といへど「さなり〳〵」とて手々に杖さぐるが過たぬこそいみじけれ。

まづ、伊弉那諾の神のみまへにすわらむとするを、まゐりあひし人の「まだ左に一社おはするぞ」といふがまにまに、伊弉那冊の御方へといざる。人をしへざりせばいかかせむとなりけむ。

やがて高天原にとうちそろひて唱へあげたるこゑいとたかしや。

月讀の神などをろがみをへつ。ひとりのもの杖そこにすてゝおそるおそる瑞垣によりそひぬ。兩の手をさしひろげたるはいかばかりと測るにや。又ひとり御垣どものはざまにいりぬ。珍しげに御うしろの方めぐるにや。

さてみなさゝめきあひて、まからむとするに、足駄ぬぎたるわたり、杖もてかいさぐれどさはらず。漸くたづねえてははゑみつゝ、一人がはくに、れいのわかきが「うまき處にきつるものかな。これも神のみちびかせたまふにやあらむ」と、いとうれしげなり。さしてゆくべきみちすぢのことなどこわだかに打語らひて皆かへりぬ。

あなおそろしのわざや。物のあやめもみわかぬ身のかかるわたりにきて、さばかりあやまちせぬことよ。三人よれど文珠のちゑとやらむ。かたみに助けあひて、

事をなさむ目あひも何の恐かあるべき。

笑ひばなし一つ二つ

阪田金十郎

不精者

ある男、極はめて不精にて、何事も働くことは嫌ひにて、朝より晩まで、臥てのみくらしけるが、ある朝、止むにやまれぬ用事ありて、遠くたち出でゝ行くこととはなりけるに、晝食の料にとて、握飯をこしらへて貰ひたれば、之を手にさげるは、面倒なりとて、ふところに入れて、たちいでぬ。風いと寒き冬の日なり。此男、手をふところにして、あゆめり。さて、晝頃になりて、腹いと減りたれば、例の不精者なれば、ふところ手を出して、握飯を取らんことを、いたく面倒がりて、饑をしのぎつゝゆくに、向より來れる男の、編笠着たるが、大に口をひらきたれば、彼の不精者思ふやう、かく口を開けるは、必ず腹減りて、物のほしければならむ。いでや、頼んで見むとて、こや〱、御身にたのみたきことあり。われ、ふところに握飯あまたもてども、出すが面倒にて、爲に、饑をしのべり。御身が口を開きたまへるは、思ふに、亦同じく饑を催したまへるならむ。半分をまゐらせんほどに、懷より握飯取出して下さらずやと云ひければ、其男から〱と笑ひ、われも笠の緒ゆるみて、笠、風に飛びんとするを、手を出すがいやなれば、口をあけ、頤を長くして、笠の緒のゆるみを支へ居るなり、腹はへらぬにあらねど、人の爲に手を出して、握飯を取り出さむこと、思ひもよらずと答へけるとぞ。揃ひもろひし不精者なり。

南蛇井村

上野國に南蛇井といふ村あり、富岡より妙義山へ行く

路なり。數年前、市町村制出でしより、此村と神成村と合併して、今は吉田村とよばれぬ。さて、此村の南蛇井とよばれし時なりき、一の旅人來りて、路のべにたてる村人に向ひて、此村の名は何といふやと問ふ。村人答へて、なんじやゐと云へば、旅人更に聲を高めて、此村の名は何といふやと問ふ。村人またなんじやゐと答へければ、まだ聞えざるか、此村は何といふと問ふ聲ますく大なり。村人はなほおとなしくなんじやゐと聲はりわけて言ひければ、旅人大にいかり、いくら問ひても、なんじやゐくと問ひかへしてばかり居る。こゝなつんぼめ、もはや問はぬぞとてたちさりたりといふ。南蛇井と始めより村の名を答へけるに、旅人は何じやいと問ひかへす詞なりと思ひあやまりたるなり。

手拭の化物

われ曾て三人の友と共に都合四人にて房州に趣き沼和田村といふ處にさゝやかなる家借りて、しばし住ひけり。ある時、余は他の二人と共に、旅立ちして、二三日かへらざりけり。その留守番は、一人は遠足嫌ひの友にたのみけり。時は夏なり。その友、夜ふくるまで、ひとり座敷にすゞみけるに、ふと、見れば障子のやぶれ目よりのぞく人の面あり。こは不思議と思ひて、眼をこらすに、またも人の面見えたり。何者にかとすてもおかれず。椽側に出でゝ見るに、釘にかけたる手拭が風にふかれて、障子のやぶれめにあたるが、人の面の如く見ゆるなりけり。のちにわれ此事をきゝて、戯れによめる、

ねばけては物も怪しく見えぬれど
　かほをふけとて動く手ぬぐひ

軍夫の妻（初夢）

石榑千亦

門ごとにたてたる松竹、軒ごとにかゝぐる旭日の御旗は、年立かへる朝の風になびき、都も鄙も大君の萬代をことほぎ、わが世の千代を祈り、歡喜の聲、天をもどよもし、地をも動かすが如し。殊に今年よりは、新たにわが國となりし地いくばく、わが民となりし人幾そばく、其地は皆同じ心に、其民は皆古き暦をなげうちて、ともにこのよき年のよき月のよき日を、年の始月日の始として、新しき心にいはゝぬはなかるべし。されば今年はわが國民のことさらに歡び祝ふべく、千代かけて忘るべからざる年の始なれば、老も若きも自ら心勇める中に、去年の一月の暮れにし折より、待ちにまちにし稚子等は、父母兄弟によろこびきこゑわぐる詞の未だ終らぬに、はやかけいでゝ、寒しともいはず、なほ吹けよ春風〳〵々々とて凧わぐるにあだし心もなく、少女がともは遣羽子に追羽子に、とり〳〵に日の暮れ易きをかこつめり。

さてもたのしげなる世のさまかな。わか家とても、いつもの如くならば、いかでかは人におくれむ。思へば去年は軍のさたのみにて、大御車は鄙にいでまし、けふの御式をも擧させ給はず、何となくさう〳〵しかりしを、なほこの子中にすゑて、夫の君とともに樂しき盃わげたりき。今年は大御車もめでたく還幸まし〳〵、皇軍は大かた凱歌うたひつゝ歸り來て、世にめでたき年にかへりぬるを、わか家のみは去年にもまさるかなしさ、子供にも新らしき紙鳶の一つだに買ひて得させず、さぞいぶかしく思ひてやあらむ。されば夫の君はいかにし給ひしか、去年の春ともにたゝせ給ひし人等は大方歸りきて、きかまほし〳〵と日にも夜にも思ひつゞけし音づれの、きかぬにもまさる言傳、つねはいと健かにおはせしに、この一月計恐しき熱の病にかゝりてわがたちし頃はまだ病院におはしきとの事、さてもいかにかおはすらむ。そも理、ならはぬ御身にてお

もき荷もつだにあるを、風土異なる世界、おもへど鬼にても易くはあらじ、况してく〵、あはれさるにてもいかにかますらむ。かくまでにおもふ心をしり給はでか、一たびだにも文給はせぬ情なさよ、男はか丶るものにか、さるにても何のたよりもなきはいよ丶烈しくなりましけむ、心もとなのことやと、わが子寢させて後も千々におもひ亂れて、夜ふくるまでつゆまどろまれず。

夫の病はいかに、もしいよ丶はげしくなり給ひて、ありてはならぬことゝなれど、萬一の事もあらばいかにかせむ。ことに一年の間に見かふる斗成長たるいとし子を、せめて一目にても見せまほし、わが身もよし一時だにかたへにあらまほしと、おもふ念力は其身をかりて、名もしらぬ山をこゑしむることいくそく、川を渡らしむることいくそく、名もしらぬ鳥の折々にとびかふはかは目に入るものなき大海原、波より波に送り迎へらる丶こと幾十日。其山よりも其川よりも海よりも多く大きなるうきめつらきめなめつくして、名のみ聞わたりし臺灣の島につきて、暑さむすが如くなるに、目もくれ心もきゑ、もだえ仆る丶こと度重なりしが、漸う病院に尋ね來て見れど、こはいかに、あたりは物ども散亂れて、あらき獸などの怒りてあらしたらむが如し。况して幾十の屍骸は、頭なきがあれど、腹えぐられつるがあるに、あはれ遺憾とも遺憾、夫の君もはやくこの中にや入りましけむと泣き仆れてありけれど、さてあるべきにあらねど、せめてなきからにてもとたづねもとめけれど、片隅に手きり去られ息も絶ゑ〵〵なるがあり、立よりて聲はりあげ、夫の名をいひてきけど、今衛の兵のなきを窺ひ、數多の匪徒この病院に押よせきて、理なくもかくさまに打ふるまひつ。その方は捕へられて、今しも彼方ざまに立さりぬと聞き、腹立しさいふ斗なく、綠の髮は自ら逆立ち、

眠さけ、怒れる姿おそろしく、用意の守り刀手に拔もち、おひし子一入かたく結びとゝめ、裾高くかゝげて、敎へられつる方へといそぎぬ。憎きたぶれが振舞や、わが夫かへせかへさずともかくよととふが如くにかけよりて、むらがる匪徒を追拂ひ、女と思ひ侮りてより來る仇は、水もたまらぬ日本の刀、當れば仆れ、さはれど又起たず。見るまに仇とも斬ふせて、見れば遙かあなたに、靑き人夫の服きて、髮はおどろに亂れ、色靑黑く瘦れおとろへて見まがふ斗なれど、なほなつかしき面影は其間に殘れり。いでわが夫健かにていまししか、御身のことよるもひるも心にかゝりて、はろはろと尋ねまゐりぬ、殘してをくがいとほしさに、この子もつれて來ぬと、いはむとすれど言葉いでず、進まむとすれど心のみにて足は前にいでず。あはれ遂に近づくこと能はざるかと、齒がみして怒れどかひなし。夫も同じ心やらむこなた樣によりこむとすれど、いましめられたる身のまゝならず、何やらむいふやうなるに、耳を定めてきけばわが名をよぶなり、答へむとすれどなほ口ひらかず、聲はいよ〳〵耳にひゞきぬ、強ひて唯といらふれば、とくあけよといふ。目ひらけば早隙間をもりて、旭日は淋しげなる床をてらせり。さてはと驚きしものから、思ひはいよいよまさりて起いでむ力もなく、なほ枕につきてあれば、又も音なふ聲す、いぶかしみつゝ立いでゝ見れば、打ゑみつゝ夫は門べにたてり。あまりのことに驚きて、尻居にどうと仆るゝを助けおこしつゝ、大晦日には船の着く定めなりしかど、ともによき年迎へむと思ゐしを、風波の爲めにおくれて、曉がた漸う港に入り、けさ橫濱よりの汽車にて歸着きぬ、病もすが〳〵しうなりきとめて健かなれば心安かれ、さるにてもかの子は無事かととはるゝに、うれしさいはむかたなく、さなりといはむとすれどまだ口ひらかず、さめてなほ夢

のごとし。

時雨

白魚女史

さつと吹く庭の木枯の折りふし、さや／＼とおとして、木の葉か、時雨か、はと／＼と窓をうつ音、あな祖父樣、なつかしや、しばしを、のう祖父さま。待ちてよ。文が物体なや、いかで祖父樣をうらみ申すべき。やよしばし、聞えまゐらす事の侍るにと、あるかなきかに、あはてゝ起き上りざま、取りすがらむとすれど、ありあけの燈火さびしげにあたりをてらして、それぞと思ふものも見えず。さては夢。夢みてありけるか、おろかやとつぶやきて、衣ひきかつぎてまどろみたるが、ふとおどろけば一しきり身にしむ軒の木枯、さや／＼とひゞきて、はと／＼と戸を叩く音。さても夢にてはなかりしよ。まさしく祖父樣か。なつかしのや、しばし待ちてよ。あな／＼誰れぞ、妾を押ふるは。祖父樣が來てなるに、とめたてまつらずや、誰ぞ、妾を妨げするなとのゝしりさけべど、がた／＼と音たてゝ近く障子を明くるけはひ、あな祖父樣かと取りすがらんとすれど、をかしや孃樣、夢や見たまふと、うちゑみつゝ、かたへの戸明るかしづきの嫗の姿に、おどろきて見あぐれど軒の玉笹の影たかく、日ははや窓にさしのぼりぬ。

文子はさすがに、おもはゆげに嫗にてありしかとひとりごち、さてもいぎたなかりしよ、疾くおこしくれなどよかりしものをと、つぶやきつゝ、急ぎ起き出でゝ、衣服をもとみにあらため終り、夜のもの取り納めんとすれど、おきね／＼それは嫗が取り納め侍らん、とく朝のきよめしたまひね。さきに此方の窓をひきあげに、こしなれどいつに似ず、心地よげにやすみ給ひたるに雨さへをり／＼、ふりかゝるやうなれど、しばらくは





かくてと思ひての事ぞ。何とて一朝ばかり朝寝を、憎みたまふ天たう様のあるべき。お祖母様のおん忌も、昨日百個日のお追善もすぎぬ。拂ひ清め參らせん、貴嬢様はお顔をとくおすまし遊ばせ。なに父君の兼ねての仰せなれば、御自分のお部屋は、他人の手にはかけたまはぬと、さるにても、やさしき御心や、さらばよきやうに、み心まかせに遊ばせ。嫗ははたき出されぬ程に、はや〳〵にげ行かんがかち〳〵と、頤かるげにうち笑ひ、裾ひきかくる様して、くりやの方へ走り行く、をかしさ。さても氣樂なる嫗よ、朝まだきより笑ひこけてと、ほゝゑみながら、文子は、文机のあたり、其處此處と、とりかたづけつゝ、思へば〳〵今朝の夢の不思儀。祖父様の面影の、今もまのあたりにちら〳〵と、見ゆるばかりの心地。母さまや、嫗や、妾がとも〴〵に涙に染めつゝぬひまゐらせし京かたびらも、早やあさましく、きれ〴〵にひきちぎれ、南無阿味陀佛と書きてしあともみわかず、面もいたうやつれ給ひて、ゆるせや文、いたうなげきを、かくる事よ。嘸や此祖父をうらみてならん、祖父も草葉の陰かへらぬ本の雫に、よろながらむせびてぞ。あしかれど思ひし事にはあらざれどとて、骨ばかりの御手にて、さしよりて、夜着の袂かひなで給ふに、あなやと取りすがらむとすれば、いつしか祖父様の御姿は見えず。はやしのゝめ近かりけむに、心もつかず、そがまゝにまどろみたるが、又もや、さつときこゆる物のけはひ、ふそみたるが、又もや、さつときこゆる物のけはひ、ふと見れば、祖父様が枕の本に立ち給ひて、文やゆるしてよ、汝が袖の乾かぬに付けても、此祖父の草葉の陰は、間なき露ぞ、かゝるうきめを、見せん事のかなしさに、十八年の年月、人にも汝れにも、ふつとおしかくしてありしを、そのまゝに、いはで消えなむよかりしものを、なまじいなる事をきかせて、かなしき孫の一生を、涙の中に葬りはつるかと思へば、身も世もな

き心地ぞする。のう文子、此祖父は、とてもかくても、やみに迷ふ餓鬼ぞ、義理も、信も、やうなき身なり、其方は、おいさきあるべき花の少女祖父が最期のくり言につながれて、よしなき義理に、あたら一生の花なちらしそ。返す〳〵も、父母の仰せになそむきそ。父母の仰せ給ふやうならむが、我には中々に、心安くおぼゆるなり云はぬは云に誠にまさりける事を、云はずと、汝がかなしきなげきも、なかりしものを、思へど文や、孫や、祖父が憎くからむ、さこそ憎くからん。我も我さへがにくし。ゆるせや拜むぞやと、拜まねどかりにして、出で行き給ふさまの、目にうつるやうにて、み聲はなほも耳に殘れるが如し。とめたてまつらむと思ふに、如何にしけん、身はえ動かず、やうやうにもがき立ちて、取りすがらむとすれど、袖さへのこらぬ消えて果敢なき曉の夢さても夢、夢とおぼえぬ御面影。曉の夢には正しき事のありとか云へど、正しく祖父樣のこされしにぞあらざるか、さらぞ物体なや、いかにせむ。妾が此の頃の涙、ゆめ〳〵妾の身を思ひかこちてにはあらず、たゞ〳〵知らぬ事ながら、十八年の年月さるよしある人のある身と知らず、祖父樣にのみ、思ひくるしめ參らせし事のかなしさのみ。知らず〳〵不孝をせし事のかなしさのみ。それが忘られぬなり。それゆゑにこそ、覺えぬ涙にくれたるのみ。ゆるしてよとわれを忘れて、壁にかけたる寫眞の下になきふして現の夢にかきくれたるが、姉上樣〳〵と妹吉野があわたゞしく呼ぶ聲に驚かされ、あな愚地ぞ〳〵かへらぬなげきに、袖をぬらさむ、人の笑はん事もくるし、思はざりきと、涙をぞそしぬぐふに、妹ははや、此方にきかゝりて、姉上樣、お父樣が呼びてなりと云ひつゝ、ふと顔をさしのぞきて、つねならぬみけしきや、胸いたみ給ひてか、頭なやみたまふかと、やさしく尋ねられては、またもわきかへる涙、見せじ

とやうやくに胸にせきとめ、いな、なにともあるにあらず、すぐに參る由申してよと答へつゝ、心の內に思ふやう、父上の召させ給ふは、必ず深見樣の事をのたまふならん。父上のみならば、わからさまに、うちあけて告げ參らする事の安ければ、必ず母樣もれろばならん。如何にしていなまばよからむ。何處までも、わが心の中の人ありと見せて、さて母樣の御なげきを、少しは慰むるやうなさん。さはいへ思へば不孝の子や不孝の子や。知らぬ事にて、祖父樣をば、長の年月くるしめ參らせ、今また母樣の御心をいため參らする事のかなしさよ。如何なれば此身は、かう不孝の子とは生れしならむ。のみならず深見樣のかばかりに、やさしう思ぼしかけ給ふものを、よく〱心なく爲しまゐらする罪の、恐ろしさよ。思ひ出せば妾が十歲の秋、敎の師に伴はれ、同じころの友と共につれだちて、何處なりけん、野邊に出でたりけるが、はるかなる山を指さし給ひて、彼方の山のすぎに、高き低き木々の數多あるが中に、一本花の盛りなる、錦の雲か桃の霞かとばかりに見ゆるがあらむ。汝れたちの目に、いかに、美しからんいかにと、敎の師のいはれしに友だちは、げに美しや〱と云ひのゝじりて、諸共に見はやすに己れも同じ處に立ち、同じ方を見亘すなれど、見えず。のび上りのび上りても、花とればしきもの、遂に見えず。何處にか、花は。妾には影も見えぬを、敎の師よ、まさしく見えてにか、敎へてと云ふに、先生はゝゑみ給ひて、何もの給はず。深見さまが、其の折り、妾がはとりに居たまひて、此君よ〱、操もふしも、此君にころこもるらめ、嗚呼、我が千歲を、たのまん、と思ふは此君のみよ、秋の末に、誰れも目に見ねぬ花を、へつらひ稱ふる中にと、つぶやき給ひしが、妾はふりわけのいふ甲斐なき童心の何事とも心づかざりしかど、ろのをりより、數ならぬ此の身を二つなき者

とは、ればし立ち給へるとか、世にもありがたき御心くめど、げにこそ袖にあまるなれ。そは、知りまゐらせぬにあらず、心なきにも侍らず。此の文が、操をもふしをも立てんと思へどこそ、なか〳〵に御身には、罪ふかき人となるとは、知ろしめさねど、御身の恨みは、誠にこそと、あなた、かなたの、むすぼる〻心の義理のかきみだるれど、涙も共に亂れか〻る窓の時雨、軒の玉笹のさや〳〵と音なふも、うきふしをそへてあはれなり。

善は小なりといへども益なしと謂ふべからず
不善は小なりといへども傷れなしと謂ふべからず

文林

冬名所　　徳大寺實則

かた岸はこほりやとけむあけ方の
みづおとほそしたま川のさと

冬木　　久我建通

年くれてしぼまぬ松にかしはきに
人のこゝろもならひてしがな

夕霙　　津輕承昭

さえさえて雨はみぞれに成にけり
夕ぐれはやきやまかげのいほ

海邊千鳥　　竹屋光昭

さらぬだに暮る磯邊のしほぐもり
行へもわかず千どりなくなり

暁雪　前田利嗣

さしぐしのあかつき寒み見渡せば
いつしか庭につもるしらゆき

冬田　水野忠敬

ふゆがれし山田のおもの稲ぐきに
おくしもしろく見えわたる哉

窓竹　諏訪忠元

打むかふまどの戸ちかきくれ竹の
なほきを人のこゝろともがな

峯月　仝

うちあふぐ高根の月をみるほどは
こゝろにかゝる雲だにもなし

野雪　長谷信成

冬かれの野川のみつのおとぞかり
うづみのこしゝ今朝の雪かな

翠松　宮地巌夫

楽しくもにはの小松のあさみどり
いやとしのはに色ぞそひゆく

神楽　植松有經

うぶすなのもりの木枯ふきやみて
神楽のこゑのさゆる夜はかな

閑庭雪　大口鯛二

木枯におちはさわぎしあとたえて
にはしづかなるけさの雪かな

祝新年　永石德文

あら玉の年のはじめのほぎごとは
君が八千代のはかなかりけり

新年鶯　仝

あら玉の年たつけふはうぐひすも
御代をほぎてや初音鳴くらん

江水鳥　蜂須賀随子

あつ氷むすぶいり江にうちとけて

眠るはをしのつがひなりけり

冬森　鍋嶋榮子

しらざりし神のやしろの見ゆる哉
冬がれわたるもりの木の間に

嶋雪　仝

とくはしる車にのりてふるゆきを
いざ見にゆかむ松がうらしま

冬燈　前田朗子

里の子がけさまろげたるしら雪の
うちにはのめくともし火の影

初雪　柳原愛子

夜もすがら吹しわらしの音たえて
初ゆきふれりやまかげのには

月夜雪　仝

夕月の影はさしながら窓のとの
こすゑましろに雪はふりつゝ

車中雪　松平健子

はならぞうれしからまし小車に
ちりくる雪のさむくもある哉

馬上雪　小池道子

むちうたぬ駒ぞいさめる白ゆきの
ふりかゝれるや嬉しかるらん

冬川　下田歌子

かち渡りするひとれはしやま川の
落葉がしたのみつもかれけん

水鳥　税所敦子

一つがひ並びてをしつゆく見れど
みづのうへにも道はありけり

禁庭初雪　仝

あしたづのつけし跡のみ見ゆる哉
雲ゐのにはのけさのはつゆき

社頭冬月　北嶋糸子

五十鈴川きよき流れにすみわたる
つきかげ寒きふゆの夜はかな

夕雪　日野西廣子

吹かせのわきて寒けきゆふぐれの
そらより雪もふりいでにけり

冬山　鶴久子

谷かげの庵まで見ゑてふゆがれの
御山もわさきこゝちこそすれ

冬野　中島歌子

冬の野は小まつが原になりにけり
すゝきわけしやいづこなる蘭

閑居新年　田邊和氣子

をとめらが羽根つく音の聞ゆなり
いつしか年のあらたまりけん

班婕婦長歌　飯田武郷

さかしかる君の御世には。さかしかる臣とたぐひて。あけたてむかたはらさけず。くれゆけむみもとはなたず。いれひもの同じこゝろに。世を治め有りときゝしを。花鳥のいろねにればれ。たきものゝかをりにめでゝ。たわやめとたぐひありかむ。後の世の長きためしに。小車のひかれやせんと。から國のさかしをとめが。いれしかへしいさめし詞。今もなほ書にのこして人ぞいふなる。

女鑑の歌の兼題によりて、一時間にかける文と歌。

新年雪　阪正臣

見ゆるかぎり白々として、飛交ふ烏の外には異なる色なし。雪のふりたる朝は、いつとても清らかに快きも

のなれど、新しき年の新しき日はまた一きはなり。曉がたよりやみたれど、日影は朗かに昇りて、東の窓を射るまゝに、壁に懸け參らせたる　兩陛下の御像、おごそかに拜まれさせ給ひ、龍顔玉容麗はしく、ゑましげにさへ見え給ふぞ嬉しき。すなはち此の御前をはじめとして、神籬にいはひまつれる、伊勢の大神、また産土の神など、それ〳〵ぬかづき奉りし間に、食堂には屠蘇の御酒、齒堅の餅のあつものなど、皆既に設けられたりすなはち、稚兒より始めて、年高き人へとつぎ〳〵にいはひもてゆくに、今日のみは、條さたらちねの、最終にたうべらるゝも、樣かはりてめでたし。皆常は嗜まぬ人々なれど、顔の色殊の外になりて、窓の朝日影と、庭なる雪の光とに輝きあひたり。いでや誰かはこの新しき年を迎へながら、雪深けれどとてひそまり居らん。このめでたきをりに逢ひながら、空寒しとて屈まり居らん。勇ましげに、樂しげに、動めきあふけはひ、遠く聞ゆるは、壯者の遊び歩くならん。遙かに隔りたる、小川の板橋を、馬車のうちつゞきて渡る、その轟のいつよりも勢よきは、皆朝拜に參上る貴人たちなるべし。やう〳〵日高くなるまゝに、かかる片山陰なる、わがふせ廬のはひりさへ、年の始の賀詞いひに來る、人の脚繁くなりて、拂ひもあへぬ雪の上に、靴木履の形あまたつきたり。之を見ても、九重の玉しきの廣庭は更なり。世に時めけるかた〴〵の、門の内外のにぎはひは、さこそと思ひ遣られてなん。

野も山も淸くしづかになりにけり
　としたちかへる今朝のはつ雪

かど松は雪にうもれしわがかどを
　何に知りてかとしの來ぬらん

雜報

●新たまの年立かへりぬれど、よろづのものごとみなあらたし。まづ手あらひ口すゝぎて、朗らかに晴れわたれる東の空に、笑ましげに豐榮のぼる朝日かげまちとりて、打むかへど、とことはにかはらぬかげもけさは、ことさらにあらたしき心地するもうれし。かくて伊勢の大宮をはじめまつりて、大八洲の國ぬちにしづまります千萬の神たちの御前をはるかにも伏しをろがみ、かしこかれども　天つ高み位のうごきなく、すめらみくにのみさかえは、いやひろにいやたかに、といのり奉るに、ふとみれど、富士のたかねは千代の白雪をいたゞきてあさ日にてり合ひたる、ゆゝしさかぎりなし。これぞ大御代のすがたなりけると、さかづきとりあげて、

君が代は千代に八千代にさゞれ石の
　いはほとなりてこけのむすまで

と打かへし〳〵うたひあげたる心のうれしさは、われひとゝもにひとしかるべしや。けさは都も家ごとに日の御旗かたくかゝげ、かどまつたてわたし、しめひきはへて、大路をゆきかふ人もいとにぎはゝし。かしこき御あたりの、大御門をはじめ奉り、ひなの山里にいたるまでに、けさはかはらぬ松風ぞふくなる。げにゆたけくめでたきみよのすがたなりや。いでや今年も去年にれとらず、數ならぬ身もつとめしまりて、國の光はかゞやかしてまし、あなかしこや。

●京都大學　文部省は、愈よ京都に大學を設立することに決し、今期の議會に、經費を要求する筈なるが、法文理醫工の五分科大學とし、其費額は約三十萬圓なりといふ。

●新事業の一部　文部省は、京都大學の外、帝國大

學、東京工業學校の擴張、大阪工業學校新設、小學教員年功加俸等の諸議案を議會に提出する由、又東京美術學校にも擴張を加へ、油畫の一科をも置く筈なりと聞く。

●醫科大學を大坂に置く　第二帝國大學を京都市に設立せらるゝも、醫科大學のみは、特に大坂に置かるべしとの事なり。こは大阪は京都に比し、人口も多く、且つ關西の樞要地にして、從て統計上生死病患の員數最も繁多なる所にして、是等の點は殆んど東京に優るも、甚だしき差異あらざる程なれど、患者解剖、施術療法の上より、他に優る地なきに依り、醫科大學を大坂に設置すべしとは、醫學社會にて、疾くに唱道する處にして、今回其筋の多數の意見も、茲に一致せしものゝ由。

●ことしの女鑑月並兼題

一月
- 廿日歌……鏡　　文……梅を見る

二月
- 五日歌……早春鶯　　文……ゆかしきもの
- 廿日歌……遠山霞　　文……紀元節

三月
- 五日歌……歸雁　　文……野遊
- 廿日歌……硯　　文……養蠶を勸む

四月
- 五日歌……花有遲速　　文……小學を卒業せし人におくる文
- 廿日歌……惜花　　文……山吹

五月
- 五日歌……待郭公　　文……除隊の兵士を迎ふる詞
- 廿日歌……田家卯花　　文……靖國神社に詣づ

六月
- 五日歌……梅雨霽　　文……田植を見る
- 廿日歌……六月大祓　　文……子規を聞く

七月
- 五日歌……樹陰納涼　　文……朝がほ
- 廿日歌……瀧　　文……苦熱の詞

八月
- 五日歌……氷　　文……避暑
- 廿日歌……寄海祝　　文……黄海戰記を讀む

九月
- 五日歌……早秋　　文……友を悼む詞
- 廿日歌……瀨車　　文……月を見る

十月
- 五日歌……深夜擣衣　　文……故鄕の母におくる文
- 廿日歌……閑庭菊　　文……時雨

十一月
- 五日歌……紅葉淺深　　文……徵兵に出てたつ人をおくる詞
- 廿日歌……爐火　　文……枯野

十二月
- 五日歌……冬月　　文……寒夜讀書
- 廿日歌……都歲暮　　文……雪だるま



門松

塩井雨江

枝こそ新なれ、色は年毎に變らざる門松や、鏡にはあらねど、うちむかへば、心にうつりゆくすぎこし影ぞ多かりける。わが初めてこのうつゝの世の中に、さすが千代もといのられしも、門松の緑りに一夜二夜の露清く、三日の朝日、新しうさし初めし頃なりしとは、父母が初春毎の物語り。母の痛みやいかなりけむ。さては、雨に風につらきのみなる浮世か原に、二葉の緑りより、かく恙なくて、人なみに大人しく生長ちにたるたらちねたらちめの、いかばかりか深き惠の露、まづこそ思ひ出るなれ。

わが八歳の師走の晦日、軒端のしめもはへられ、門松も植ゑられ、一夜あくれば、正月なりといはるゝに、ふりわけ髮の、わけもなく嬉れしく、わが好めばとて、祖父が京よりの戻りに、あがなひ歸りて給へる烏賊紙鳶の糸を、繰りかへし卷きかへし、

つねは小鳥と共に、ねぐらを急く身が、夜半すぐるまで、いねむと思ふ心地せず。やうやくに喜びつかれては、枕の邊りにうち飾りて、糸のはしを手にしつゝ、まどろむとすれど、風や吹け吹けと、野邊をめぐる紙鳶遊び。わはや風にさつとすくはると見て、おどろけど、日かげは、何時しか、門松の枝にかゝれり。何にしに、疾くおどろかせたまはざりしよと、ことしも變らぬ幼心、むづかり初めにむつかりて、餅いはふまも心ならず、祖父を促したてゝ、門ちかき野邊に舞ひ出れど、折りふし、峰の杉むら吹き立つ朝風に。追はれて、紙鳶はやがて空なり。心も共に宙を駈りて、糸のはしを腰に結びもちて、野邊を此方彼方躍りめぐれど、さすがに疲れたり。

母にも見せて、うちほこらむと思ひ立つまゝ、立ちかへりて、門よりかゝさん／＼とよび立つれど、きこゑずやあらむ、見ゑず。入らむとすれど、門は高し。おろさでは入らじ。紙鳶は心地よげに舞へり。下さむは、かひなし。母には見せまほし。とかく思ひ困うじてながむれど。側に枝をのゝしてこゝ貸さましといひげに立てる門松。童心に、こは屈竟と思ひざま、糸のはしを結びおきて、やうやうに、母をた

づねあてゝ、ほこらむものと、頻りにいさみ來て見れど、何處へいかにしけむ、つなげる枝もろともに、紙鳶はあらず。遙なる空に、雲とばかり見えて、飛びゆくは、まさしくそれなり。泣けど叫へど、風は心なし。思ふがまゝに追ひやりて、遂に紙鳶は見えずなりぬ。

あまりのくやしさに、ものもおぼえず、躍り上り躍り上り、三度四度ふみたゝきたけど、門松はさんざんに成りたる無慘。なほも蹴散らさむと狂ひたる時、忘れもやらず、母の常に無くおごそかにたしなめたまへる言葉。あな、何する。わろき奴や。かしこくも君が代の千代のためしにいはふなる門松を、心なく踏み散らす者やある。童とて、ほどこそあれ。さる心にては、おいさきいとおぼつかなし。父の家つぐべき子と成るべうも覺えずと、涙に成りて、戒めたまへるを、よそにして、泣きてのみ、紙鳶ををしみにたることもありけり。

わが故郷は、ま木立つ山の麓わなりけり。門松は都の手振を寫したるにあなれど、市にて買りも求めも爲すに非ず。裏の山邊をあさりゆきて、枝よきを擇り定めて、取り歸へるなり。われものおぼえてより、父上が毎時必ず自ら行かれぬ。家の主人

なるが擇るが、所のならひなれどなりけり。われも常に伴れぬ。思へど、今日ころと、父上の門松こりにゆかるゝ日は、かねてもわが樂しみまたれたる日なりけり。山ぶみをめづらしといふにあらず、花に紅葉に踏みなれぬ。木ずゑこるわざのめづらしといふにもあらず、柴木こる音は、朝夕さらず、きく宿なりされどげに、樂しき日なりけり、何といふわけもればねずて。大かた師走の二十日あまり五日ばかりの定めなりけり。其の頃よりろ、奥寺の手習も、休みとなれは、いまはしき海蛸子法師のにがき貌見る恐れもなく、紙鳶に、羽根に、骨牌に、遊び敵は多く、飾に木の實に、糧は思ひのまゝにて、たゞ遊べ〱と、父も折りふしは、紙鳶の相手。母も夜毎に骨牌の件れ。松の色の常磐にさかねん、世界に大名を轟かさむなど思ふ下心も、いまだ見ねねど、冥土の旅の一里塚などとは、もとより思ひひかむ方もなけれど、門松が間は、げに少年り世の中、少年のこよなき樂土、何に待たれずやは。其の日のうれしさは、かるがゆゑにやありけむ、今こそ道理は知らるゝなれ。されどにや、六日の夕つ方、門松の堀りかへさるる頃は、何となう心細し。明日、明後日、まもなく此の樂土を離れて、いまはしき

海蛸法師に叱らるゝ時のちかしとれもへどなりけむ。ゆく水のしどらくもとゞまらぬよのありさまを思ひいたふ心あるべくもあらねど。われ學びの道に志して、故山の境を出てたるは、昨日門松に匂ふ光りと共に、初めて十五の初春を迎へたりといふ頃なりき。思ひさしたる道、路み遂げずは、誓て再ひは、故郷の門は見まじものと思へど、門の板橋、したゝかに蹴かへして、いさみ立たんとすれど、をりふしさつと吹ゝろす山風に、門の柳の枝、三すぢ四すぢ、はらはらと亂れて、袖に面にうちかゝれるに、ればねずも、引きかへされて、見かへれど、母と共に、門ちかく送り出て玉ひたる父上の、何とかればしめし玉ひけん、あなわか子や、汝れを今日うち立たする心を、知りてか。殊更に今日この門より出で立するわが心を知りてか。いはでも知りつらむ。返へすがへすようになせろとのたまふに、承りぬ、霜に雪に努屈することには候はず、御心やすかれとぞかり、莞爾とうち笑み、袖をはらつて、決然たち出でたるが、けふぞかりならぬ門の小川の水の、いざよふかげの、何となう眼にうつりて、二足三足たゆたへど、なほ見送り玉へる父母も、また俄に文世々くく々々、嫛時や、雪子かと呼びたまふにふりかへれど、わ

わたゞしく驅けつけにたる朋友。

彼は仆れぬばかりになりて、走りよると共に、ものをもいはず、ひたなきに泣きぬ。母なりけるが、手を取りもちて、兎角慰さめきこゆるに、かれもやう〳〵涙を拭ひ、をばさま、をばさま、今日とは兼てきゝまゐらせば、文世の君には一大事の首途なり。みづからも御名殘り惜し。是非に一度は、御別れを惜しまむものと、昨日今日この日頃、朝に思ひ夕べに願ひてのみありしが、よく〳〵叶はず。さはとて、文世の君がはる〴〵の首出、よそにのみすぐしては、今日より身を措くべき空もおぼえ侍らず、餘りに名殘をしさの忍ぶべきやうもなく、堪へずなりて、竊にまゐりしなり。危かりき、すんでに悔しかるべき事なりき。容させ玉へ、人々。心なしとな落し玉ひそ。何ごとも甲斐なき身を見ゆるしたまひね、文世の君。さても、名殘なしや。かへす〳〵恙なく、着き玉はゞ、便りをと云ひて、またえいはず。袖のつゝみもこらへずなりて、瀧とばかりあふるゝ涙、小川の水も亂るらむ、音たかし。

生体もなき人を抱きよせて、母なりけるが、さてもよく〳〵心にかけ玉ひて、うれしさよ。やよ文世、よろこびいはずやと、教へられ玉へるも、いかにせむ、胸も咽

喉も、涙につぶと塞がりて、いふべき言も知らざりけり。知らざるにあらざるも、言に出でなど、涙もこぼれむとすれど、さすがに男子のいふべき方の無かりければ、唯三度四度首をさげたるまゝにて、ものもいはず、五六間走り去りたるが、怺へずなりて、わつと泣きぬ。涙ながらに、なほ五六間歩むともなく歩みて、初めて見かへれど、母と雪子とは、立ちたるまゝに、なほ此方をまもりたり。

何となう引きかへされて、ふりかへりがちに行けど、あせ路にわたしたる丸木橋、いつになく足の踏みどたしかならず、よろ〳〵とよろめきかゝれど、唐衣にはあらねど、母がわざ〳〵新しうつふりたてられたる旅衣の裾を、くやしくも汚したる耻しさ。彼方には、あなやといふ聲して、母も五六間、雪子は一町あまり走りよりて、れ怪我はとが、勢一杯の一言。われも有り難うとが始終。いふ甲斐なきは、思へど、少年の文世なりけり。されど、何となう、一日は心も空に、二日はさながら夢の中なりけり。霧あるにあらねど、野邊も山邊もればつかなくて。

あはれ雪子。女子なれど、わがためには、よにむつまじき竹馬の友、初めて共に野山を駈けめぐり、茅花菫花に、花籠を並べにたるは、彼れも我れも七歳のはじめ、

それより、春秋はあれ、花紅葉はあれ、たゞ彼と我とは、變らぬ色にのみむつまじく遊びくらしにたる竹馬の友なりけり。學びの道も、二人おなじ日よりふみわけ初め、文世雪子といふ名札は、おなじときより、おなじ寺小屋の同じ壁にかけられ、色も形もおなじ机は、墨さへ硯さへ筆さへおなじに、おなじ席の隅に、おなじ列に並べられ、同じ朝より、いろはにほへとは、習ひ初めにたるむかりの花の友垣。去たしとて、かく別るゝは、殘り惜しく悲しかりけり。ましてや、きくことも見ることも、思はざりき、それを限りの名殘りとすべき別れなりけむとは思へた、いよ〳〵殘りをしき別れなりけり。

都に五歳六歳の星霜、いつしか消ゑゆきて、わが二十歳の春の初め、忘るべきかは、學の窓の門松に、のぼれる日かげのうらゝかなるに、なか〳〵に故郷の天の忍たれて、うちながめたるをりしも、母よりの文。何よりもうれしさに、疾く披けた、海墨の色、筆のあと、常には似ざりけり。よらせたまふ年波のあらはれてかと、そゞろ胸せまりて讀みくだせた、父も健康に、母も無事、たゞ悲しきは涙痕一滴、くちたしくも、雪子がわへなくとの七文字をにじませたるころ、無念、終世の無念なり

しか。

彼は人にも、父母には殊更やさしかりけり。花をあつめ木の實を拾ふ間も、三言に一言は父母の事にて、折ふしは餘念もなく戀しうなりてか、程遠き野邊より山邊より、雪子も走れど、文世も走りて、互に家路を急ぎしこともありけり。彼の母なるが亡くなりたまへるや、亡骸を抱き、棺にすがり、墓に取りつきて、彼が嘆きたるありさま、かくては彼も空しく消えやせむと、少年の文世が心にも、れぼつかなかりき。彼が繼母は、さる人とも見えざりしが、春子といふ妹生れてより、雪はむづかしきものに思はれ、一向に邪慳の鬼と成りぬ。過ちも罪も無きにいひのゝしり叱り散し、うちたゝき、書も文字も女子の道にあらずとて、水仕女と共に、内に外にいやしきわざにのみ追ひつかひ、雪は早く消えよとぞかり、非道の限りを盡くしたり。されど雪子はわが首出を、懇ろに託るべき暇も無かりしなり。われもまた懇ろに、別れを留むべきたよりなかりしなり。

されど、あくまでやさしき雪子、命の限りはと、まめやかに仕へ、頻りに心身を苦しめたるが病の根と成り、遂に繼母が鬼の無慈悲といふ刃にかゝりて、彼はあへな

くなりぬ。花の友がき、思ひ出でもなく散りはてぬ。思へば、うらめし浮世の嵐、情なき人の心の嵐うらめし。われと雪子とは、げにあどけなき交りなりけり。たゞ諸共に花をあつめ、木の實を拾ひ、諸共に學の庭の露わけ初めたるにすぎず、げにいはけなくあどけなき花の友がきに過ぎざりしなり。されど雪子々々、彼を散らしたる怨みは、われ遂に終世忘れがたきなり。春といへば、わが門松のたもと、訪づる丶人はいと多けきも、遂に、またかばかりやさしき孝女を見ざればなり。嗚呼。



かどまつ

（をはり）

副總裁鍋島侯爵令夫人

◉本會贊成員の貴婦人方は會則に詳なり

大日本女學會

總裁は在せらるゝ畏きあたりの尊名は事情有て當分掲げず

◉**目的** 本會は家庭教育の本源たる女子教育の普及を圖らんが爲め通信教授の法によりて講義錄を發刊し小學卒業後入學すべき高等女學校の設け無き地方又は父母の許を離れ難き女子をして〻學せしむるに在り其學料の程度は成るべく實用を主として平易に講述し務めて輕佻の風を避け一般婦人の智德を高めんことを目的とす

◉詳細なる**會則**入用の向は郵便切手二錢を封入して申込まるべし

◉**掲載科目及擔任講師** ●修身（華族女學校長細川潤次郎君）（日本弘道會長西村茂樹君）●國文（華族女學校教授關根正直君）●作歌（華族女學校教授坂正臣君）●地理及歷史（大學院在學文學士大森金五郎君）●理科（工學士近藤會次郎君）●博物（理學博士石川千代松君）●作文城北中學校長今泉定介君）●習字（御歌所勤務大口鯛二君）●家事經濟●育兒（女子高等師範學校教諭後閑菊野君）●家庭敎育（三輪田眞佐子君）●生理及衛生●看護（醫學士呉秀三君）●禮法女子高等師範學校教諭佐方鎭子君）●裁縫（共立女子職業學校教師渡邊辰五郎君）●割烹●活花●點茶（元華族女學校講師田邊和氣子君）●小說（伊賀局）（依田學海君）●詞藻●雜錄●雜報

會員募集

講義錄は講習の期を二ヶ年とし毎月一回宛廿五日に發刊す一回の紙數は菊判二百頁以上とす毎卷鮮麗の圖畫數個を挿入す

會費は一ヶ月金三十錢とす入會の節は別に入會金參拾錢を要す

第貳卷まで既刊

東京市麴町區土手三番町廿八番地

大日本女學會

女鑑第百號目録

(明治二十四年八月八日内務省許可)
(明治廿五年三月十二日遞信省認可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊(三ヶ月分)	十二冊(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十九年一月四日印刷
同　年一月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所(電話番號一九四六)　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)